

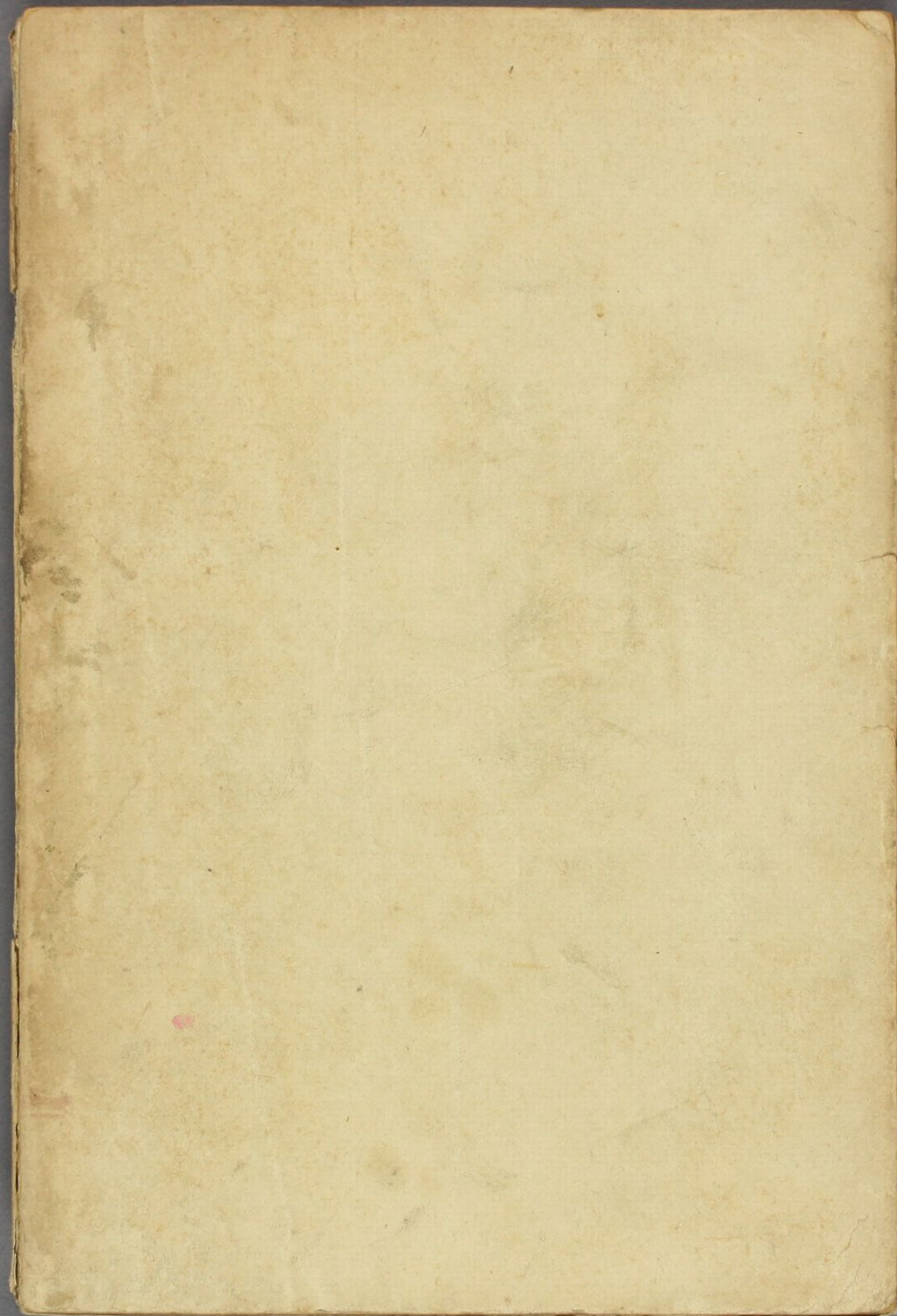


東

天

紅

詞林典故  
卷一  
坡著



東  
天  
紅

筒  
井  
齊  
著

この集を畏友岳陽小川才吉兄の梧下にささぐ

平木白星氏よりの書簡

筒井董坡詞兄

『遇はずして思ふ』といふ事がある。所謂見ぬ戀にあ  
くがれるので。君と余とが則ちそれだ。君と余とは未  
だ一面識も無い。君は余に作詩十數篇の内見を許して  
くれたといふ。ただそれだけの仲だけけれど。魂と魂と  
が紫紐でしつかり結びつけられてあると見えて。慕ひ  
慕はれてゐる。かくの如く相遇はずして相思ふのは。  
東京と舞鶴が四百五十哩足らず隔たつてをるからでは  
無く。君も知る如く。君と余とは一たび數間の距離を

以て近接した事があつたでは無いか。それでありながら。到頭相遇はなかつた。

忘れもせぬ去月十日の事である。福知山まで出かけた折に。君の病氣が氣懸りなので。その地へ君を見舞つた時だ。君が臥てゐる二階のついで下なる土間に余は立つたのだつた。生憎その朝君が多量の咯血をして。今や昏睡の状態にあるといふので。面談は謝絶された。君も後に聞いて残念に思つたらうが。遙々丹後まで尋ねて行つて。その人の顔も見ず。話もせず。別れ去らなけりやならぬ余の身になつても見るが好い。その遺憾さはどの位だと思ふ。

二

けれど。余は諦めた。相遇はずして相思ふのが君と余との因縁だと悟つた。『遠く離れてゐて近く交る』といふ妙な運命に二人は縛られてゐるのだと諦めたので。それに。強てお目にかかりたいといふては御家人に失禮だし。君にも氣づかひをさせるのが痛々しいから。遠慮して言ひたい事も言はず。今はいつたばかりの門から出て大阪へ引返すことにした。

ああその時だつた。阿母様と令妹と愛兒とは。門外まで余を看送つてくださった。余も無言なれば老人も令妹も沈黙して余の顔をただじつと見まもつてをられるばかり。そのお二方の眼には涙が一杯溢れてゐた。

三

それは余が悪かつたので。男の癖に愚癡らしく自分がまづ泣面を見せたからなのである。余は純白な前掛テマリの縁端を弄ぶりながら。あどけない顔をしてお辭義をなすつた愛兒を見るや。萬感胸に迫つて泣かすには居られなかつたのだ。

その時である。力の無い咳嗽が二つばかり二階で聞えて直に止んだ。あれが病董坡だなと思つて腕車の上から頸を伸して振りかへつたのを君は知るまい。君があの時どんな夢をみてゐたかを知らざる如く。余の心に思ひつつ口へは出せぬ残り惜しい切ないおもひを。君は夢にも知らなかつた。

その時だ。余は蜚鳴居を出て停車場へと腕車を駛らす途すがら。車中で考へた事がある。それは『遇はずして思ふ』といふ一事なので。

遇はずして思ふ。そこに詩があるのだと考へた。董坡君が永らくの悪疾に悩みながら。病床に軀は横臥しつゝ。空想は天地を馳けめぐり。神仙とも魔鬼とも接すれば。無心の花とも相語るのは。それが則ち遇はずして想ふのではなからうか。

遇つて目につく自然のみが詩の對象では無い。在りのままの事象を在りのまま描出したのが詩の總てではない。詩人は超自然主義である。自由主義である。遇



はずして思ふ空想が詩歌の本源だ。

六

君や余は到底必然律因果律等に支配されて一步もその手から逸出する事のできぬ自然をば。そのまま描寫して満足してはゐられぬ性分を有してゐる。君はどう思ふか知らぬが。自然界は器械的世界だ。詩人は一切の自然法を超越した大自由大自在の境界に逍遙遊する。詩人は自由主義でなければならぬ。遇はずして思ふ空想は畢竟詩の母なのだ。

遇はで思ふといふ事に深趣があるとは。君の家を訪ふて遇はずに別れた時。心頭に浮んだ感想である。

今回。君の詩集『東天紅』が出るにつき。何か序文

でも書けとの註文であつたが。君も知つての通。余は偏窟な男で。自己の著書に先輩知友の序跋文をつけた例もなく。自分も他人の高著を汚した事がない。將來とてもこの片意地はつづけるつもりだから。折角のお仰に背くのをどうか悪く思つてくれたまふな。希有の才人と崇敬してゐる友の病患に苦みつつ余に爲した要求を。すげなく斷るといふのは。情に於て忍びないがその頑固なところが余の余たる價值だと一笑して。そればかりは許してもらひたい。

阿母様や令妹の至り盡せる御看護に。慈悲と愛情とを深く味ひ得る幸福な君は。自己の天任を信じて。心

七

を飽まで強く持ち。自重の上にも自重をして。而して  
一日も速かに快癒せられんことを余は禱つてゐる。病  
に負けるな。死んでも死ぬな。君には大なる天職天任  
がある。前便にも言つた如く。詩人に死もなく老ひも  
ないのだ。

ハ

常夏月の六日

平木白星

序

つゆの雨蕭々いに青葉に降り注ぐ。秋意なりき。林田久吉氏訪ね來り、曰く、友人高井重成君の遺稿を讀んで久しく胸案にあり。高井重成氏その病を慰めんと、君が從來の佳詩若干を撰び、これを君の手記として印行近きにあり、願はくは序詞一篇をもしよせよと。余も亦る六七年前、わが漢學にありて文學雜誌の編輯に従ふや、重成君の遺稿のうら、月毎に必ず其所作幾篇を寄せ來る特志の投書家數はあり、詩に、文に見るべきもの少からず、その中殊に秀でたるもの一二を撰び、別に欄を設けて毎號誌上に發表することに定めしが、忘れもあへず、高井重成君は唯かにその唯一人なりき。吾は當時其所作を先で、君の才華を想ひ、留めて止まずんば後必ず名を

を飽まで強く持ち。自重の上にも自重をして。而して  
一日も速かに快癒せられんことを余は禱つてゐる。病  
に負けるな。死んでも死ぬな。君には大なる天職天任  
がある。前便にも言つた如く。詩人に死もなく老ひも  
ないのだ。

常夏月の六日

平木白星

### 序

つゆの雨蕭やかに青葉に降り注ぐ昨宵なりき。林田久吾氏訪れ來り、曰く、友人筒井葦坡君宿痾を擱いて久しく病床にあり、親友某氏その病を慰めんこ、君が従來の作詩若干を撰び、これを冊子に編して印行近きにあり、願はくは序詞一篇をものせよと。

今を去る六七年前、わが浪華にありて文藝雑誌の編輯に従ふや、數多き讀者のうち、月毎に必ず其所作幾篇を寄せ來る特志の投書家數氏あり、詩に、文に見るべきもの少からず、その中殊に秀でたるもの一二を撰び、別に欄を設けて毎號誌上に登載することに定めしが、忘れもあへず、筒井葦坡君は確かにその隨一人なりき。吾は當時其の所作を見て、君の才華を想ひ、勉めて止まずんば後必ず名を

成すの人たるべきを信ぜしが、幾ばくも無くして雜誌は廢刊し、吾も亦浪華を去りしかば、君と君が作と兩つながら又相見るの機無くして今日に到りつ。今にして突如君が重病を抱いて、郷關に歸臥せらるるを聞く、吾において殆舊知の情なき能はず

吾は不幸にして君が最近の所作を見るに及ばざれど、君が當年の才華を想ひ、努力を想へば、其の詩境の進捗まさに刮目すべきものあるを信ぜざる能はず。詩壇の前途は春の海の如くのごくに、偏に若き才人の來り棹すに委す。君願はくば加餐して、健康舊に復するの日、葦坡集第二を著して、世と吾とをして再び君が進境に驚かしめよ

六月二十三日

薄田泣菫識

これは去る三十九年十月末迄の詩友兼山君より薄田泣菫君上へ送つて手に贈られたし  
一編なり今この集のほりめに記して君が厚意を感謝す 病 葦坡

筒井菫坡君に

作山紫山

西向の窓にもたれて、病みはてる願しむめつつ、雲裏さかゝる夕を  
君は又苦吟やすらし、いくさ燈荷送船や鳥の如群る、が中を五大力、  
眺して入々来る、舞鶴の港わたり、いく月の朝な夕なを、歌にし  
も送れる日數、熱ひかて氣六ヶ敷も、暮れかゝる枕の障や、せつな  
げに敷ゆる君が、顔やいかに冷たかるらむ神よこの歌の友には、あ  
たゝかき御手を賜へ。

成すの人たるべきを信ぜしが、幾ばくも無くして親誼は疎列し、吾も亦浪華を去りしかば、君と君が作と兩つながら又相見るとの機無くして今日に到りつ。今にして突如君が重病を抱いて、郷國に歸臥せらるるを聞く、吾において殆ど知の情なき能はず

吾は不幸にして君が最近の所作を見るに及ばざれど、君が當年の才華を想ひ、努力を想へば、其の詩境の進歩まさに刮目すべきものあるを信ぜざる能はず。詩壇の前途は春の海の如くのごとくに、風に若き才人の來り極すに委す。君願はくば加餐して、健康舊に復するの日、葦坡集第二を著して、世に吾をなして再び君が詩境に驚かしめよ

六月二十三日

薄田 泣 菫 謹

こは去る三十九年十月未見の詩友紫山君より萬朝報紙上を通つて予に贈られし一編なり今この集のはじめに記して君が厚意を感謝す 病 菫 坡

筒井菫坡君に

作 山 紫 山

西向の窓にもたれて、病みほてる額しわめつつ、雲寒きかゝる夕を君は又苦吟やすらし、いくさ艦荷送船や鳥の如群るゝが中を五大力帆して入り來る、舞鶴の港わたりに、いく月の朝な夕なを、歌にしも送れる目數、熱ひかで氣六ヶ敷も、暮れかゝる枕の際や、せつなげに敷ふる君が、頬やいかに冷たかるらむ神よこの歌の友には、あたゝかき御手を賜へ。

わが懐める時、わが瘖める時、親しく  
我を慰めくれし恩人はこの詩なり。わ  
れ今永き眠に入らむとす、のこりて獨  
り世にわれありしことを傳ふるものも  
亦この詩なり。

早苗月すゑの澁れる日

董坡病生

わが懐める時、わが瘖める時、親しく  
我を慰めくれし恩人はこの詩なり。わ  
れ今永き眠に入らむとす、のこりて獨  
り世にわれありしことを傳ふるものも  
亦この詩なり。

わが換める時、わが寝める時、親しく  
我を慰めくれし恩人はこの詩なり。わ  
れ今永き眠に入らむとす、のこりて獨  
り世にわれありしことを傳ふるものも  
亦この詩なり。

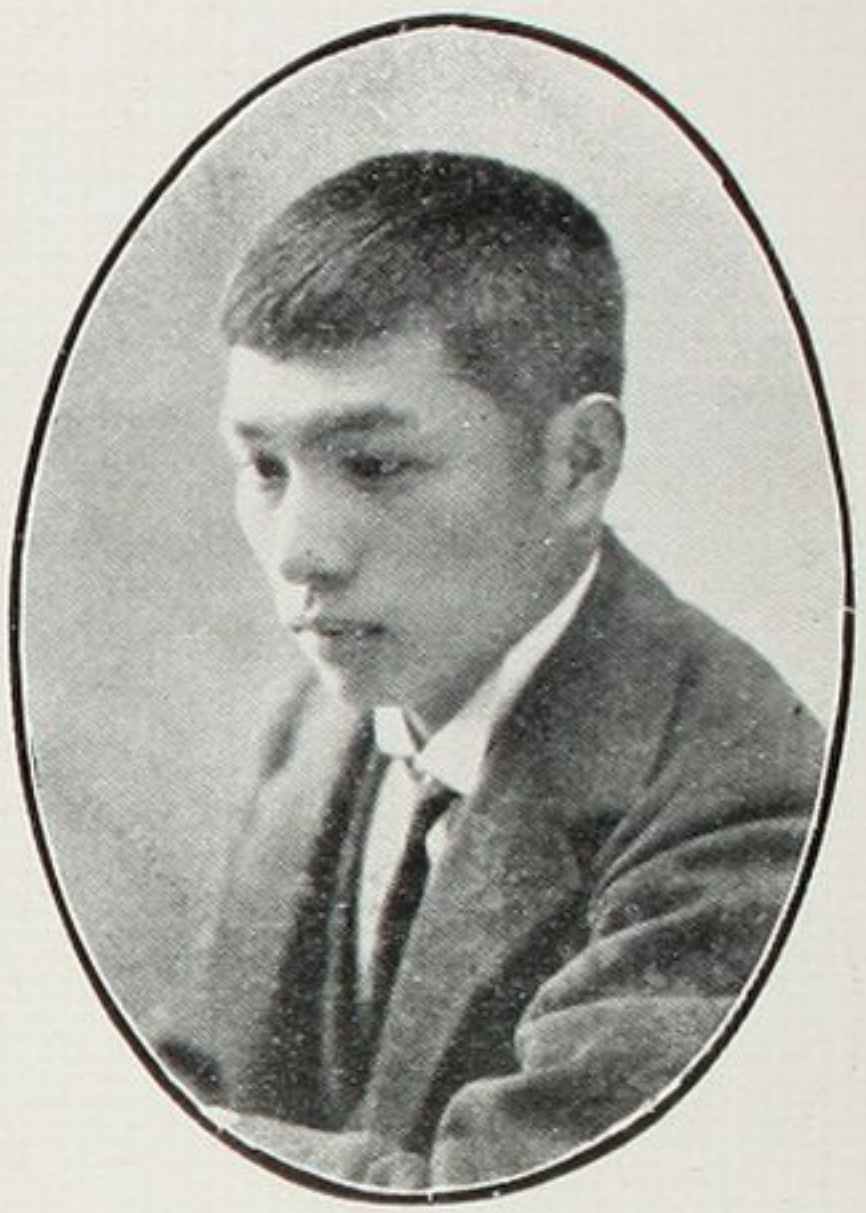
早苗月すまの寝れる日

菫坡病生

かゝる世にふらふの心はもろきをまじりて  
空の雲流離るるに似て白くも雨に  
身はもろきをまじりて潮の音もあはれ  
まらぬ海も山もあはれをば  
わが死を思ふははなはたあはれ  
天の雲も雨もあはれをば  
水もあはれをばあはれをば







著者小照と病中草稿

常夜少の

襟裾折れし薫る病室の夜。空を

くよそ寝るのうらみも昔の如く。水へまをさす。白蓮

花のまきつりや昔の如く。はなももも。あなをみるわが

羽づくろしするまもも。んをみるわが。あなをみる

あなをみるまもも。んをみるわが。あなをみる

あなをみるまもも。んをみるわが。あなをみる

あなをみるまもも。んをみるわが。あなをみる

あなをみるまもも。んをみるわが。あなをみる

二

八十歳の昔は。十九歳の昔は。熱い。あなをみる

あなをみるまもも。んをみるわが。あなをみる

あなをみるまもも。んをみるわが。あなをみる

あなをみるまもも。んをみるわが。あなをみる

あなをみるまもも。んをみるわが。あなをみる

あなをみるまもも。んをみるわが。あなをみる

あなをみるまもも。んをみるわが。あなをみる

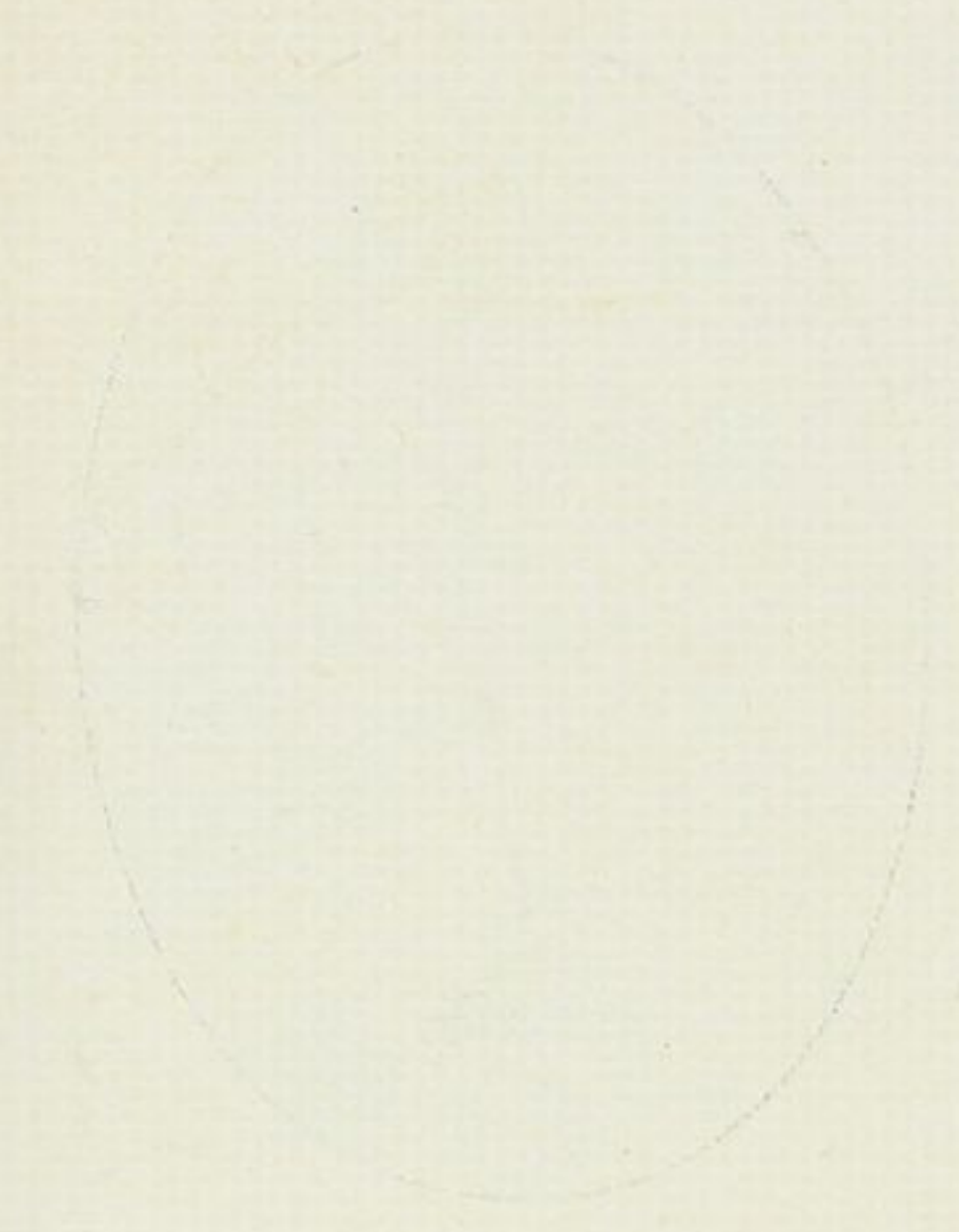
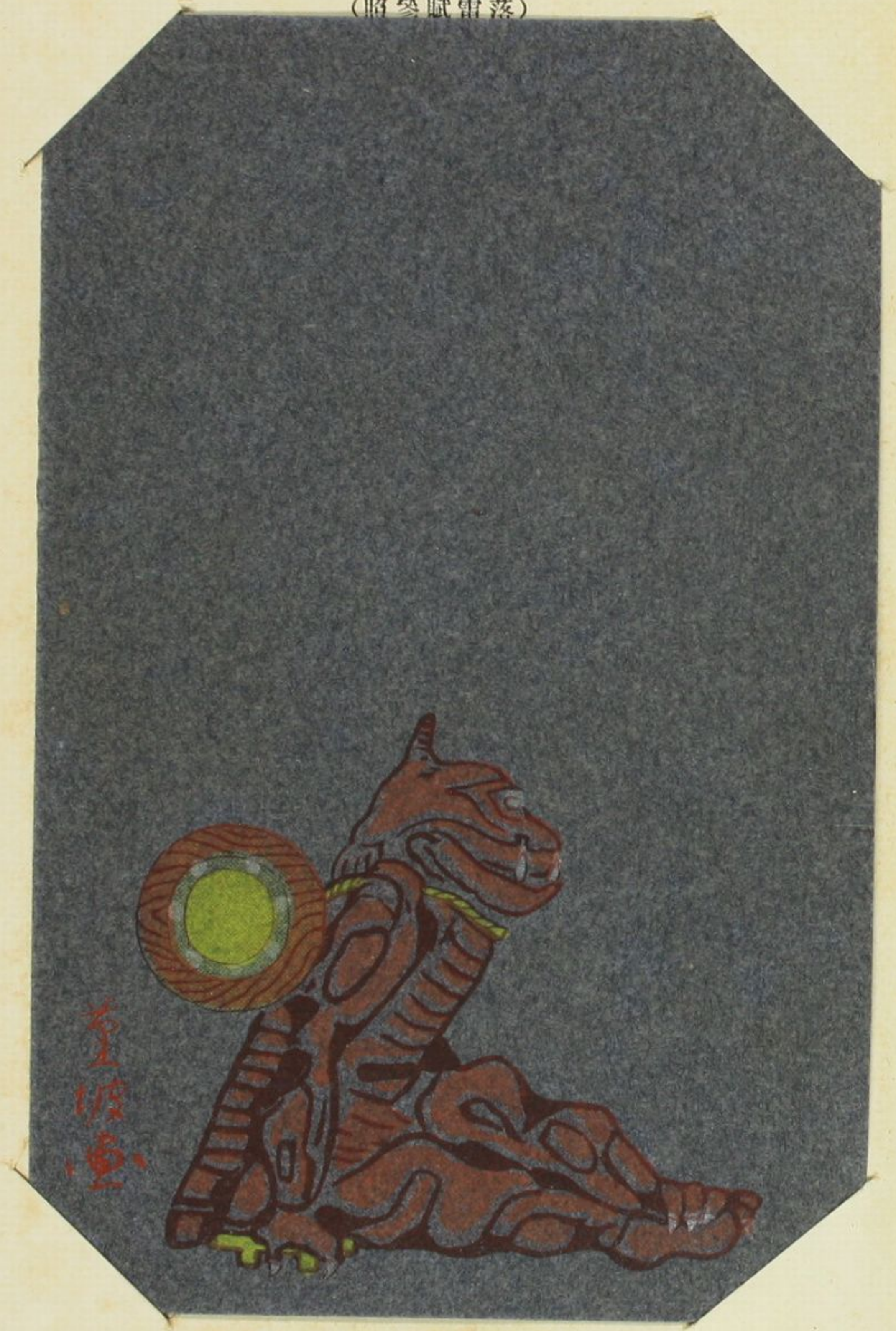
あなをみるまもも。んをみるわが。あなをみる

あなをみるまもも。んをみるわが。あなをみる

あなをみるまもも。んをみるわが。あなをみる

あなをみる

畫 自 坡 董  
(照參賦雷落)



目次

漏刻博士	一
七くさの唄	三
破魔弓	五
猿曳	七
かかる日	九
闘鶏	一一
霹靂調(旅順陥落)	一三
湯がたり	一五

ふたつの瞳	一七
年はぎの歌	一九
新春頌	二一
勅新年河	二三
鍬初め	二五
年男	二七
机上の牡牛	二八
黒海	三〇
烹賣茶屋	三二
島	三四

小しほ浪吉	三六
戀	三七
小野の春	三八
夜櫻	四〇
蕨賣	四二
手毬唄 評判娘	四三
立春陰	四五
小學校	四七
囿園	五〇
凧げる日	五二

春の風	五四
築城技師	五六
自嘲	五八
相思樹	六〇
叡山踰	六二
雛棚	六七
焼野	六九
人をしたひて	七一
佳人怨	七四
樂しき家	七六

野火	七八
伯勞の巢	七九
寄居虫	八二
初午詣	八四
草餅	八六
出陣歌	八八
春雨	八九
盆梅	九一
春の川	九三
春宵	九五

わだつみ	九八
『正一位』	九九
與作雲雀問答	一〇〇
蠶の歌	一〇二
磯の春	一〇三
春の日	一〇五
涅槃會	一〇七
幻の京	一〇九
街の裏	一一二
京の春	一一四

春風	一一六
やすめ田	一一八
春晝	一二〇
春村夜興	一二二
おぼろ夜	一二四
茶摘唄	一二六
新繭	一二七
水泡音	一二八
夏は來ぬ	一三〇
金魚賣	一三六

卯月のふる郷をしのびて……………一三八  
 春日まうで……………一四〇  
 京すだれ……………一四二  
 紫陽花……………一四四  
 こぼれ麥……………一四五  
 螢狩歌……………一四八  
 猪牙船……………一五〇  
 暮六つ……………一五二  
 彗星……………一五四  
 合歡花の窓……………一五七

節賣……………一五九  
 垣根草……………一六一  
 日盛り……………一六三  
 お美矢……………一六五  
 蝙蝠の歌……………一六六  
 蒙古來……………一七一  
 隣どち(小扇と繪團扇)……………一七二  
 麥秋……………一七五  
 蟻軍……………一七八  
 井筒……………一八〇

虫干 ..... 一八二

落雷賦——(口繪參照) ..... 一八四

一樹の蔭(蝸牛と蛞蝓) ..... 一八六

京ぞめ ..... 一八九

簾賣 ..... 一九一

繡眼兒 ..... 一九三

機おり唄 ..... 一九五

夏ばな賣 ..... 一九八

田園夜興 ..... 二〇〇

童謠(三篇) ..... 二〇二

夏去秋來賦 ..... 二〇六

秋立つ日 ..... 二〇八

東天を望みて ..... 二二〇

野の者 ..... 二二二

銀行 ..... 二二四

軍星 ..... 二二七

滿作歌 ..... 二二九

旅ゆく君 ..... 二三〇

糧 ..... 二三二

渡頭 ..... 二三四



里の秋	二二九
かかる夕	二三二
停車場	二三三
病める文鳥	二三六
落鮎	二三八
孤兒	二三九
野分	二四三
阜螽	二四六
盆踊	二四八
磯日和	二五〇

野の戀(案山子郎と鳴子女)	二五二
秋の日	二五五
月夜の虹	二五九
落日	二六二
廢園	二六五
碑	二六七
里の秋	二六九
小春日	二七一
針	二七三
行秋	二七五

冬立つ朝	二七七
冬翁來	二七九
並木道	二八〇
磯の冬	二八二
坤女怨	二八四
獺狩	二八六
みのむし	二八九
網代守	二九一
小春日	二九三
雪の朝	二九五

冬ざれ川	二九七
靈鹿	三〇〇
年木山	三〇五
寒の餅	三〇八
群鯨來	三〇九
冬ざれの舞鶴	三一一
吸入器	三一三
懷爐灰	三一六
愛の曲	三一八

東  
天  
紅

漏刻博士

筒井堇坡作

辛うじて息する  
寮窓の灯は  
寂寥を惜ひて

残光を滅せり

曉のみ神は

黄金雲さうぞき

白駒に鞭して

夜の幕も潜りぬ

曉は來れり

美しくしき夢より

萬衆を覺すと

白妙の衣に

緋の冠つけたる

漏刻の博士は  
朗らかに高宣る  
一日の占さだめ——(鷄を)

### 七くさの唄

曉の小溝で根芹を摘めば  
町へ出るとて畔をばこちへ  
田舎稼ぎの御萬歳  
——ソレ御萬歳

吉が畑の雪かきわけて

ちやつと見つけた五形と薺

春のはこべら佛の座

——コレ佛の座

菘<sup>すいな</sup>すずしろア手づくりもので

揃<sup>なぐさ</sup>た七種でんでこでんと

赤い襪で囃す妻

——アレ囃す妻

似合た夫婦がおもしろ世帯

まめで暮して笑ふて啜る

熱いお粥で舌もやく

——ヤレ舌もやく

## 破魔弓

造化秘密の種子を埋め

さて偉<sup>おほ</sup>いなるみ手舉げて

爾曹なんざうこれに幸覓さいえよと  
雨と光を賜ひたり

大和は壤つらも饒かにて  
伸ぶれば喬たかし天そそり  
紫雲あさ翳あひびく朝明あさあけを  
鳴りのひびきに醒めし今

ひんがしの天そらうかがへば  
子等新らしき年ほげと

島根島山かぎりなく  
樹たてし巨木おほきぞこれや破魔はま弓ゆり

## 猿 曳

羽子かをり鞠にほふ  
あらたまの年はじめ  
富みたるも貧しきも  
ほろ酔の屠蘇とそきげん  
都路たよを経緯よこに

幸あらむ山の子が  
 柴を背に山住みの  
 なりはひぞやすかるを  
 人まねる稚子猿が  
 舞ぶりのさがしきに  
 さまよふや西東  
 罪なきに答あてて  
 咎なきに綱つけて  
 めでたとは何のこと

猿ひきの夫婦もの

かかる日

もの麗かのかかる日は妹が部屋なる  
 繪襖の番ひの孔雀脱け出でて  
 匂へる庭の若草に彩羽ひきすり  
 籬の外を遠ありきして歸るらむ

ものうららかなのかかる日は丸山がくれ

ふる里に似し里ありてすぎし夜の  
夢に見し子もうちまじり我が品評など  
かたりつつあらむ思ひに氣羞かし

10

ものうらかなのかかる日は昔住みにし  
浪華津の宿に移れる人妻の  
餌がひの鳥に聞き惚れてわが凭り馴れし  
おばしまに小肘かけてやまどろまむ  
ものうららかなのかかる日はなごめる海を

われ思ふ美しくし人は友禪の  
袂帆にして紫の幾島よぎり  
笑まひつつ來らむ心地になづかしき

## 鬪 鶏

勘作が門の草  
青青と萋る上  
煙草して高嘶す  
鶏主のこゑのどか



立見する村の衆や  
涙垂らす童らに  
圍まれて東西の  
力士いまたたかひぬ――

関あがる――囂然と  
裏山に反響して  
笑ひ聲やむ頃を  
學校の時太鼓

矜り顔の羸鶏が  
鷹揚の羽ばたきに  
連翹の花こぼれ  
くだちゆく春の晝

### 霹靂調

(旅順陥落)

いくたび天の隕りに觸れて  
いくたび地の震ひを見しや

神の榜笞か——懲しめよ

一四

黄金山頂迅雷轟き

老鐵山下義軍は奮ふ

これぞ烽火か——憤りの火

四萬の生靈煙と化して

ク將赴援の遅鈍きを怨む

終の運命か——天の罰

巨艦空しく尾緒を斂め

花と矜りし旅順は頽る

天つ裁決か——應報ぞ

### 湯がたり

湯札買はしやる都の人に

いれてみせたや五右衛門風呂に

俺ら村さを誇るだねえが

高いお山の金神様の

一五

岩が笑ふて噴いた水  
勿體ねえほど綺麗な水で

云

伴、吉さが花嫁もろて  
裏の畑に閑閑天と  
建てた新家の鮑屑  
婆々が皺手のたきつけ加減  
這入り快地のぬくもり快地  
これさ五體がゆるむべえ

### ふたつの瞳

活動の靈妙み形相  
大慈悲の光も也たに  
みそなはす二つの瞳

黄金いろ一つは晝を——  
(豊熱と希望と競争)  
よみがへすなべての物を

一七

しろがねの 一つは夜を――

(濕潤うるほひと快樂けらくと團樂まどろみ)

物みなを唾りにさそふ

時の輪のさしり音に

かがやかかの瞬はきつよく

偉いなる哉やふたつの瞳

### 年ほぎの歌

潮花うしほさく東より

海母瑞氣うみずきを齋いせば

西に峙たつ白髪しろかみの

山父紫雲やまぢを地に投なげて

子等年壽こらねげとあまたたび

使者しやはくだりぬ鳥とりと化なりて――

ここにぞ年は新たなり

南にむかふ萬歳や

北にわかるる猿曳や

歡喜の聲は市にみち

野にみち村にみちみちて

盈ちてこぼれぬ湖に川に――

平和の徽號かがやけど

樹つや旭日大國旗

大盃悉す朝戸出に

馬騎ばかまの裾踐んで

よろめきよるや松かざり

歌はあがりぬ鞠の羽子の――

### 新春頌

高告れる博士が聲に

嚴の戸の樞は軼り

こがね衣きらにさうぞき

曦の神は出でましぬ、いま

おん手よりかたぶけたまふ

玉壺也『福祉』の液は

滴りて瑞氣とながれ

清淨の國をし裏む

縦横に天馬は翺り

あたらしき光を撒けば

唵喁ふや胸なる郷も

わだつみも大野も山も

逆しる歡笑たかく

活動のあゝ新天地

額あげて舒かにほがふ

稚兒めきしここにわれは

題勅 新年河

水ぐるまめぐりては

あらたまる新春や

さざれ石きらきらと

かがやける大き川

睦まじの女夫岩

わかれては渦巴

舞ふてもくもる流れ

乗合の渡し舟

しめ鼓ひだり手に

萬歳は笑顔して

### 鍬初め

十畝の畑は宏ひろからず

されど祖先の譲りもの

土は饒かに石稀に

日承けよろしき畔なれば

肥料こえはさばかり與へずも

牛蒡は太き根を下ろし

蕪は肥えてほこらしく

艶ある哉や大根葉の

六

明くればうれしはつ鳥  
手飼ひの鶏もうたへるに  
のぼる初日に對<sup>むか</sup>ひては  
手こそあれたれ三拜の  
朝の禱りも疎からず  
雑煮のまどる今了へて  
道が手馴れし煩冠り  
與作は孜孜と鍬初め

## 年 男

長家住居の二十とせを  
文字なき身には妻もなく  
苦さへあらざりただひとつ  
匿<sup>かく</sup>す忠實<sup>しんじつ</sup>の一徹に  
いたくあるじの寵を得て  
六十路<sup>むそぢ</sup>の皺はつくりたり

七



年もあけぬと初鶏の  
うたへるきけば床を蹴り  
釣瓶いまくる車井の  
さて若水になにげなく  
むかしの戀か二つ星  
涙はもろき年をとこ

元

### 机上の牡牛

聖母が乳の凝りけらし

白きは石の大理石  
ある日彫匠が験を得て  
刻みて成りし牡牛哉

牛はもとより置物の  
さは巨きうもあらねども  
尖れる角にさほひみち  
踏みたる四肢に力あり  
みどりの帛を蔽ひたる

元

机の上を野邊とみて  
二尺はなれてながむれば  
生あるものに肖たりけり

## 黒海

闇なる國を孚みて  
光明を永久に施かざれば  
母は魔の手の黒うして  
海と呼ばむに畏れあり

彼女ある日を東洋の  
族が許に婚ばれむと  
白粉厚く粧ひて  
水紅いろ裳裾褰げしが

神の宥さぬ戀なれば  
潜るとせしを御聲あり  
咎めや水門の扉に觸れて  
簪笄拗り拗らる

闇なる國を搔い擁いだき  
光明を永久に施かざれば  
漂ふ水の黒うして  
『南、南へ』これや魔の歌

三

### 烹賣茶屋

浪華津の街盡頭まちづれ  
橋際はしぎはの烹賣茶屋  
春風に飜へる

### 小廂の繪番附

芽をふきし柳には  
樽つけし馬繫ぎ  
椽先に臂据ゑて  
馬子は今茶碗酒

なまいだあ——珠數さげて  
お彼岸へお詣りの  
耳うとき媪さんに

三

躑ついて行く村小町

別嬪!!!と口わろき

若者の調たがひ戯あそびや

庭鳥は八ツうたひ

夫婦らし六部来る

## 島

指すかなた紫の

島の入江はよき入江

人美しく聲清く

なべて柔順すなほのさがと聞く

さればここをしよぎる者

このよき島に舟寄せて

妙たなる歌のよきうたを

聞かんがためか白帆捲くなる

小しほ浪吉

空から見たら光りもしよぞ  
光るはずだよ彦島星だ  
俺らかうして漕ぎ出たからは  
舳首や廻さぬ暴風が来よが  
ゆけや玄海逆捲く濤に  
舟は裂けよと離りよが二人  
小門は小鳴門戀まく渦に

けふも海布を搔く浪吉小汐

戀

きらめく星よ——聖燭か  
波のひびきよ——搏つ脈か  
胸にたたへし紺瑠璃の  
潮、無窮の戀と湧き  
詩歌の國を繞るかな

春は海より慕ひきて  
木靈を山に讃するを  
我が乗る駒を君ひきて  
染分手綱ゆるやかに  
八洲の春を愛の歌

完

## 小野の春

柳芽をふく小學校の  
やぶれ太鼓が十一鳴つて

笑ひ出したよ愛宕の山が

畑けや十畝でもわがものなれば

村で天狗の百姓殿は

妻と並んで鋤うちならす

鶏がとまつた緋桃の枝の

干した小簀に陽炎がたつて

足のもとから雲雀があがる

完

小野の野社のやしやうぐひす啼いて  
水車守る子が息吹いぶきのやうに  
畚かどの兒を揺る春の風

## 夜 櫻

淡うすけはひ枝垂しだれさく  
名木めいげの夜ざくらに  
ぞろぞろと浮れ出る  
鳴東の舞姫ら

驕り焚く篝火の  
はなやかに照り映はえて  
満園にいざよへる  
花の香かや衣きぬの香や

たかどの宴はてて  
假名文字の小提灯  
鼓もつ小妓去り  
千金の宵よはくだつ

## 蕨 賣

「端山はやまの春の初はつわらび  
可愛お手々に何にぎる  
あけてみんせ」と口がるに  
日永ひながの街まちをあつちこち  
そとよび入れて一把二把  
まけた九文の山の幸さい

笑ふと染めた齒が見えて  
伯母おばによう肖にた蕨わらびうり

## 手毬唄

——評判娘——

ここら近所の評判むすめ  
一つ二つと指折り申しや  
人のよいのが髪結おとき  
二つ風呂好き煙草屋お玉



水の垂るよな植木屋おもと  
四つ容子ぢや仕立屋お縫  
色の白いは糸屋のおまき  
六つ婿取や染屋のお愛  
涙脆いは質屋のお袖  
八つ瘦地な機織おしま  
心立なら塗師ぬしやお艶  
十で隣のとつとき娘  
すらり並べて振袖させて  
揃るた姿がながめたやく

### 立春陰

瑠璃装ひなる佐保姫が  
愛の裳裾に觸れにけむ  
匂ひ冷たき息吹いきして  
頭擡げし路の臺  
さびれ葉がくれ世を窺のぞく  
姿さながら師の君が  
併に狂へる禪相や

坡を越えて西北する

『冬の翁』の後追ふと

鷓鴣せはしく飛び去れば

小篁の扉そといでて

簫鴛が朗らけく

讃ずる歌のうららかに

今朝や春立つ雪解畑

### 小學校

『君が代』の唱歌の聲は

にほやかに園にながれて

柵の外の菜の花畑也

揚天の鷓鴣口疾にまぬる

環をなして女生徒あまた

春風にリボンなぶらせ

足をかく手をかにかくと  
嫺やかに舞踏の稽古

罌

明け放つ校舎の窓に  
鞭とれる先生見えて  
塗板を頻りに指しつ  
諄諄と何か説くらし

柝鳴りぬ——やがてどやどや  
なだれ出ぬ運動場へと

鬼ごっこあるは縄飛び  
鞠投げや嘻嘻とし遊ぶ

こなたには小使部屋に  
鳥羽繪めく老いし校僕  
日南ぼこ午後のいとまを  
鶯に水など浴ぶす

柝なりぬ——今し生徒は  
教室に入りて閑かに

罌

一陣り花こそ吹雪け  
鞦韆はねむげに揺るる

囿 囿

姫奪ると胸のおくがに  
たくらめるあり顔咎め  
夜廻りの女巡邏は  
索うちて率もきぬ——やがて

琅玕のまろき楹に  
緋珊瑚の楣わたせる  
うつくしき戀の囿囿に  
洩がれぬ——罪びとわれは

振袖の獄吏らあまた  
かぐはしき花の筈して  
さいなむとおぼえてさめぬ  
手枕の春の夜の也め

風げる日

剪り惜み貯ふる  
ちよん番の鱧七が  
鼻唄に網綴る  
後ろつきをかしさに  
笑ふらし丹後富士  
磯山の一角に

訛り鳴く鶯の  
あどけなき聲かすみ  
鈴ふりてねぎ事す  
人もあり濱やしる  
一灣に春日さし  
櫓の聲もさき馴れて  
惰鷗<sup>のらかも</sup>晝夢み  
栖みあきて寄居虫が  
宿かふる永き日や

磯沿ひの花菜畑

翔りたちかしましく

天あめの宮みや視みくとて

いくかへり通ふらむ

揚雲雀落雲雀

## 春の風

巽たつみに高さ青葉山

和尚懸空如意とりて

片手に扱とく疎とら鬚

詠みし名歌に雲ちりて

晴れて軟もちかな春の風

風に袂をなぶらせて

姐さんかむり草履がけ

若狭少女は裾褰げ

吉阪峠足ばやに

濱へ出てゆく一筋道を

築城技師

五

夏近き異形の

雲峙てる良

小高きに相して

鑿形たくみに

累累と築きし

適れの金城

列貫きし十九の

壘壁の砲眼

地に對いて啓ける

嚴たりや要害

茶褐色の衣に

凜凜しくも劍佩き

巨きなる眼鏡す

老技師は今しも

工匠らを聚めて

竣成を祝ぐとや

五

「花屋」より呼びたる

美酒うまさけに醺もひつつ

風薫る白日まひるを

城廓じやうかくにならびぬ——（蜂の巢を）

## 自嘲

雛ひなたびにし乳ちの母に

むかしのわれを尋ねれば

『ひひなのごとくゑみたまふ

めぐしの稚子におはせし』と

開いて散りて二十はたとせを

桃は園生に老いにける

柳の鞠を蹴らんずる

高さ望やいまいかに

妹いもが袂たもとに偷ひそみたる

小さき鏡を掌てにうけて

ことさら笑わらみて覗うかがひし



わが頬の紅はうすかりき

杏

父が譲りの古刀

秘してまもらばやすかるを

都にいでて何の功

けふも鋼の筆を握りぬ

## 相思樹

裏に三坪の空地あり

もとの家主が物好きの  
梅と杏を植ゑにける

年を閱せる十五年

甫めを梅は梅にさき

杏、杏にさきにしが

杏は梅の香をしたひ

梅は杏の色に媚び

相思かたみの精やからみけむ

梅は杏に杏は梅に  
さてはけぢめもわかぬまで  
花さへ實さへ一つなりけり

### 叡山踰

八瀬の鶯老を啼さ  
菜種實の熟る圃徑を  
右に辿れば一乗寺

山氣は凝りて山裾の  
青葉若葉をぬらしけり

喘ぐに艸の露もなく  
清水覓めてもとめ得ず  
蜜を躑躅の花にすひ  
熊能笹わけてのぼりける  
日枝は険しき山路にて

頂高し二千尺

上りてみれば近江路の  
 山は東に杳かにて  
 志賀は繪のごと近江富士  
 はしや孚くむ鴉の海  
 菅の小笠に日を蔽ふて  
 うしろ戀しと晒るなかれ  
 西の都は朧にて  
 見れど見わかぬまぼろしの  
 不滅を説くか閑古鳥

下るに袂風かろく  
 夏を矜れる鉾杉の  
 晝なほくらき木下闇  
 たまたま雲にうかがふに  
 杜鵑の聲は高からず  
 雨に嵐に刻まれて  
 講堂驕り寂びたれど  
 青丹の彩は雅保をちて

山靈の寵衰へす  
美や莊嚴を極めたり

周三抱へ巨杉の

かげに泉を掬びては

辨慶餅にふさふなる

媪禪の片はづし

すすむる澁茶興はあり

袖すれあしひ雛僧に

山の掟を言問へば  
白衣整して聲低う  
可愛や禪味ものがたる  
賢し十二の若隱者

雛  
棚

緋桃しら桃にこやかに  
柳にさげし膝り鞠  
春は雛のうつくしう

戀かささやぐ唇の  
はなやかなりや京紅みやこべに

さすがにわかき女雛めびなは  
はにかみがちの袖几帳  
不老の白酒さけの香に酔ひて  
男ひゝなのよりませば  
ゑみておはしぬ古雛

眉うるはしき伶人が

亥

五人雛子もおもしろう  
二つ折なる銀屏に  
あまたの雛の影もれて  
雪洞ゆきほりにはふ夢の高殿

## 焼野

現うつらに睡る野を焼けば  
胸の春駒戀を得て  
わかき血汐に狂ふごと

亥

燃えて趨はしれるかげろふや

七〇

白たてがみき鬣たてがみふりみだし

西さほに勢さほへる駿しゅんそく足の

みるみる丘をのぼりては

凱からどき歌うたあぐるほのほ籥ほのほかな

あらおもしろのながめよと

匍はらぶ匍はらぶひて吹く牧の子が

すさびの笛は草なれば

おのづからなる野の調しらべ

ほのほは高く天あまに和なぎ

笛の音清く地に流れ

情おもひ想おもひ融とけくなる春風の

また夢に入る紫野

人ひとをしたひて

春駒遊ぶ磐城野を

七一

君もし焼かば早蕨の  
あげてかはゆき掌也  
秘めし句ひをこぼすらむ

ふぶく櫻に袖かへし  
み興漫ろの徜徉に  
やさしき詩を君誦さば  
霞やなびさかをるらむ

君むらさきの山の人

われは堇のつつみもり  
かたみにひかむ歌姫の  
彩のみ帯の端と端

小窓の紅梅葉となりて  
人なづかしく春の宵  
おもひは衿をすべりでて  
めぐしの雲にまよふ哉

佳人怨

夢しばしばのおののきに  
起きて静かに膝よせて  
紙燭點する春の夜を  
黒髪くしう亂れたり  
小窓片戸をかるうひき  
苑そののけはひをうかがへば  
朧の月の光更けて

黒き山吹かつちりぬ

人に嫁ぎの衣をなみ  
袂短かうきりし身の  
安なまじかるものを愁なまじひに  
象ものの情なきけを詠みてより  
深山山籠みみ山住との  
谷の鶯名にいでて  
都大路の若人わかをとが  
けふも柳のいとながき文



樂しき家

麗かなれど遠ければ  
訪ふ人もなき一つ家を  
とふはやさしき思出に  
古巢を慕ふ燕にて

梁にとまれる鶏さへも  
見識り貌なるおももちの

互に馴れて親しめば  
草屋の春は暖かに

表の柳裏の桃  
床に雛はかざらずも  
若き夫婦は笑顔よく  
活きし雛の如くにて

翁は門に梅を接ぎ  
姫は春戸に蓬摘む

樂しき家は菜の花の  
黄金の波にもられつつ

其

## 野火

野火は走れりみんなみの  
岩を衝くと関揚げて  
御領の幕と春姫が  
曳きし霞を綻ばし  
めぐしの夢を奪ふべく――

野火は走れり關守が  
結びし草の戸を焼きて  
戯れむつる糸遊の  
袂やぶりてもゆる手に  
くはしの戀を偷むべく――

## 伯勞の巢

一日病上りを「心極園」にさまよひて

其

花ふぶく公園の  
水繞る築山や  
鴟鳥のしば通ふ  
みそかぶりさながらに  
思ひ寝を戀人の  
胸にいる魂たまの如ごと  
翔はぶさまの訝まかしと  
丘にたちうかがへば  
玉椿たまつばき咲くなかに  
さがしくも産屋うぶやして

いたいけの雛鳥を  
かくまへる物怖おそぢや  
あたたかに孚はぐみて  
巢立たんはいつの日か  
花の香に智慧づきて  
葉守をもおどろかす  
めぐし兒と生ひたむ  
春の日の永ければ

寄居虫

磯うつ浪におののきて  
岩に潜みし寄居虫も  
海士が月こふ欸乃きけば  
ふたたびいでて髭研ぐと  
かけさらほひしうつせ貝  
うらぶれはてし身をよせて  
わがもの顔の汝はしも

世の奇人に似たるかな

松風きよき連歌の濱

ある夜ひそかにさまよひて

眞砂に彫りし戀歌の

潮に花とや咲きにけむ

金波銀波とかがやけば

海老偕老の曲を舞ひ

新居の家のはなやかに

今宵戀妻小蟹を娶る

八

### 初午詣

風にとられな櫛鉢帽を  
汽車の窓から頸つき出して  
あれがあれく本願寺

(どうせ序よちよっくら京の  
紅屋奉公の娘に會ふて

笑顔見やうか久し振り)

赤い毛布けりごに春風切つて  
烏居くぐれば狐がわらふ  
投げたお賽錢が鏝貳文

貳錢易者に掌見てのひらせて  
お世辭よろこぶ喜右衛門殿の  
胸がほどけた真田紐

八五

ホ、ホ布袋さんや鶯笛は  
可愛盛りの孫への土産  
媼にや何やろ南瓜種

## 草餅

蒲公英<sup>たほ</sup>ゑめる山かげに  
ひなびし乳母が宿訪へば  
年波よするおもざしに  
われをながめて言葉なく

まづこぼせるは涙にて

むかしをなきてものがたる  
うすき記憶<sup>おほえ</sup>の里歌も  
ものなづかしき一つにて  
南にひらく董野に  
あそべる稚兒も偲ばるる

春は萌えづる新蓬<sup>にひよらぎ</sup>  
ゆかしき草の戸を染めて

くみて侑むる澁茶にも  
おのづからなる味甘う  
濃みどりにほふうまし草餅

### 出陣歌

日はひんがしに輝きて  
今か吹くらむ春の風  
正義の旗の征くところ  
そこに勝利の兆あり

一たび矛を交へては  
贏たて已みぬる男の子かは  
劍を抜いて指す方よ  
闇に瞬く北斗一星

### 春雨

ねすみ木目の春雨合羽  
そつと小脇に燕口の

中は『安宅』かさりヤ『五大力』  
 粹な乙鳥が袂に觸れて  
 ふれた刹那はすみにちよとみかへりの  
 跳ねを氣にする爪掛つづの艶  
 白い素足に納戸おが染りて  
 紅い蹴出しがちらほらちらり  
 蛇の目傘柳が煙る  
 可惜あたら縹緞ひんをかくすか斜かたに  
 どこへもきやす京小町

盆 梅

接いて二とせ桃の臺  
 叟、吉助が丹精に  
 今年ももちしふくよかの  
 やさし苔は十七つ  
 幹を鎧へる姫苔に  
 いたく氣品は昂りたり



土にくまなく寂びもてば  
鴨川石に榮えはあり

三

書齋の春はあたたかに  
今朝し枝頭に雲をよび  
ましろの花の花ゑみに  
笑むや葩はなびら九つの

駛るがことき枝ぶりの  
龍にせまるを我命びて

いつくしむなる『狂ひ龍』  
鉢は備前の無瑕もの

### 春の川

南丹波の雪解けて  
保津川下る筏乗り

花は蕾も也たかにて  
霞ながるる西の京

三

南をさして澱川の  
淀の川瀬の水車

やみぬめぐりぬ長閑かさの  
風もやはく川楊

白きはうれし一反帆  
舟人はよき聲よき男

唾へ煙管に棹なげて  
ゆるき流にまかせたる

丸木筏の筏士と  
浪花の春をものがたる

## 春宵

長者が門のときめきを  
狸砂撒く大板

化け了せたる公達に  
袖すり合ふて別れたる  
浪花の街は朧にて

亥

川十文字に流れたる  
橋の袂の糸柳  
なよやかなるがうれしうて  
しばしを岸に佇めば  
鼓の音もきこゆるよ

花見歸りの舟よびて  
花の樽をたづぬれば  
可矣とこたへて鉢卷きの  
舟夫は顔さへ櫻して  
棹の雫に笑わかし

東に霞む名橋の  
袖に穿くむ金城は  
さながら絹の繪卷もの  
鯉江川と猫間川

丑

會ふて流るる水緩し

六

### わだつみ

春澹<sup>たひよ</sup>へる新潮の

美しくし國にまづ寄せて

北に還るを怡ばす

八洲を繞る八千八たび

あなや怒りて逆捲けば

罪あるものの息を奪る  
不盡の水も掌<sup>て</sup>に掬<sup>う</sup>けて  
嘗<sup>あぢはひ</sup>むるに禪の味や  
さても和<sup>なご</sup>めば滔滔と  
八洲を繞る八千八たび

### 正一位

赤い鳥居が簀<sup>す</sup>から透<sup>す</sup>けて  
雪解ばたけの麥<sup>あぢはひ</sup>はや五寸

五

權が倅は唐子の如うで  
太鼓うつうつつけふ初午と

100

頭あがらぬ家來の狐太  
東十五里伏見の山へ  
はれのお使者にのぼつたあとは  
風にはたばた『正一位』

### 與作雲雀問答

『鄙に育つて甲斐しよもの  
天女戀しと揚雲雀  
狂ふてあがる久方の  
雲の御殿で何舞ふた』

『何が舞はりよぞ三千の  
姫の簪に目が眩み  
玉の階なれぬ身の  
ついふみ外れて二萬尺』

101

蠶の歌

白銀しろがねの糸吐いといて

こもり居いの玉宮たまみやや

柳垂枝やなぎだ永とこき日ひを

黙想もくそうの夢心ゆめこころ地ぢ

蠶この君きみは姫ひめと化なり

繭殿まゆどのの窓まどあけて

かろらかにいでたまふ  
舞衣まひぎぬの艶麗あやびやか

磯の春

漂浪兒うらなご寄居虫よきむしが

迷まよひ來きし砂村いさむら

宿搜しゆくそうす永とこき日ひを

藻茸家もぶきやの窓まどに倚より

吹呖あきびする手長蝦てながえび

春風をひた孕み  
 帆立貝出る頃と  
 龍宮ゆき客のせて  
 波止場へと急ぐらし  
 車海老跳りつつ  
 潮くさき船宿の  
 蟹が炊く午ひるの飯  
 ブツブツと泡潰いて

むら鷗夢のどか  
 波に散る櫻貝

### 春の日

鳥啼く聲につと立ちて窓しあくれば  
 蝶をちひらら心の駒を遠をちに誘ひく  
 今陽炎は野に煽ほひて若草薫り  
 そよ風の幻をこそ運び來れ

告<sup>ひばり</sup>天子霞みて山笑ふ京の田舎を  
 はなやぎて行きすり匂ふ櫻人  
 また近江路の舊き道杉の臥木に  
 腰かけて鶯聞ける旅の衆

菜の花匂ふ大和路をなづかしみつつ  
 法螺鳴らし峰入すなる山伏等  
 あるは長閑けき寧樂の晝鹿の子にざれて  
 大佛の鐘に興がる都人

病あがりの徒然を目にこそ浮べ  
 みな古りし記憶のかげの美しさ  
 風に翻<sup>か</sup>れるつばくらや繪<sup>か</sup>凧を眺め  
 われは今瞬くひまをかく思ふ

## 涅槃會

説經上手の後住がほしと  
 珠敷を片手に善兵衛殿が  
 涅槃詣での獨り言



日毎炷く香の煙に煤け  
れ色ア黒けどお菩薩さんに  
れ皺だらけの顔はない

二頁

破れ襖を隠して貼つた  
賈の應擧の虎さへなこに  
けふは鶺鴒ひたきもなきに來い

晝のね堂で夢見てござる  
寢釋迦覺まそと力を入れて

花に鐘つく貧乏寺

### 幻の京

にほやかの被衣かるげにたよたよと  
白玉姫がしとやかの蓮歩につれて  
鳳凰ぞ舞へる心地の長閑けさに  
かけるや京へ我心小禽のごとも

染分の手綱ひきする春駒の

三頁

息吹に萌ゆる嫩草に糸遊たちて

鼓師が庭の緋桃に奴風

かかりてもがく永き日の興の洛東

つばくらめくぐり馴れたる繪暖簾

細目にわけて外のぞく女あるじや

金絲もて孔雀羽織れる西陣の

機に射し入る春の日のわかさかがやき

さてはまた鶯うりと紅賣と

もきずりあひに見かはして笑める朱雀野

加茂川に蒞める館たちの欄に干す

べに友禪の蒲團吹き狂ふはるかぜ

華やかのかかるけしきをひためでて

今かへり來しわが魂は小窓をそよと

彩畫びらかく机をありき胸に入る

うつらうつらの束の間を——幻なりき

街の裏

閑かなる街の裏  
角ぐめる葦が根に  
あたたかの潮あげて  
水ぬるむ春の川

舟泛けて鱈漁る  
頬冠りの習人

高らかに欠伸して  
れほどかに晝かすむ

どこやらむ普請すか  
をりをりをかかんかと  
麥ばたけつたひ來る  
鑿たたく音のどか

肩脱ぎの嘉十爺が  
陽炎に畑打つ

ねどけたる後ろつき  
鶯に日は晴れぬ

## 京の春

大比叡の雪解けて  
都吹く春の風  
うち晒す友禪に  
華やげる加茂の水

東山夢さめて  
もたに吐く薄霞  
息吹する層塔の  
若やげるほほ笑みや

ほの芽萌む柳縫ひ  
大原女の唇ふりて  
ありきゆくそれも書よ  
しかすがに京なれば

春風

長閑さを吳織漢織が  
熟練なる霞の衣に  
さかしうも姿躲して  
春風はまる山くだり  
美しく友禪さらす  
加茂の川輕げに涉り  
好きありく都大路を

つばくらめ柳に翻る  
横町の紅屋が暖簾  
そとのぞき門を行交ふ  
舞姫の袖にまざれぬ  
幾達かよざりて角の  
教會の唱歌に聞き惚れ  
接吻けぬ窓の繪がらす

やすめ田

梅ちる里の鶯晴れ  
藪蔭沿ひの休め田  
いささか温む水面は  
はゆる残照に紅らむ  
豊旗雲をうつして  
夕づく小野の静けさ

毒芹水漬く田の隈  
うごめくものよさながら  
黒き琥珀の勾玉  
解ぐせしさまのをかしき  
蛸斗のひと群

榛の杪に嘴研ぐ  
旅をいそがぬ鴉は  
少女さびたる田螺が  
みそかの戀の假名ぶみ

ぬすみよみして笑ふか  
梅散る里のうそばれ  
藪かげぞひのやすめ田

## 春 晝

そよかせうけてくるく  
木賊いろなるぬり籠  
うらら春日の小窓に  
金糸きららの緋の衿

午の餌を與る妹に

『別嬪さん』と鸚鵡が

訛りをかき追従

日永狭庭にかつちる

あらし馬酔木の垣ごし

見ゆるあらはのとなり家

仕立あがりの小やすみ

じやるる島田のお針子

春村夜興

誰ぞながす里うた

臚なる京みち

榛<sup>は</sup>なみ木縫ひゆく

小提灯三つ四つ

八瀬むらの扇田

いろ黒の田螺が

髭ふりて大原へ  
婿にゆく春の夜

『さてもあの世話好き

腰がるのお出入

蜷藏<sup>まきぞう</sup>が媒人<sup>まいてど</sup>に

なつてやら——めでた』と

茂平田の蛙が

とりどりの取沙汰



ぞろぞろと見に出る  
物好きの蜆ら

おぼろ夜

かかる夜は神代めき  
ほのほふ珊瑚樹の  
くれなるの小枝のぶ  
下かげをなづかしみ  
阿古屋貝うつくしき

眞珠をや孚まむ

しかはあれ茅渚の海  
急瀬戸の男鱸に  
迷ひたる鯛姫が  
失戀を嘆かひて  
尼になる夜ならし  
月朧漁歌おぼろ

茶摘唄

白い手拭姐さんかむり  
字治は茶所さて唄どころ  
京訛みやこりを半分交せて  
可愛鄙みやびぶり都ぶり

茜襪あかねでしぼつた袖の  
裡うらに秘かしたるるが

嘘でないなら若殿若葉  
憎うおもふてつめりやせぬ

新繭

八幡ぬけて新墾しんげんの  
八兵衛山の桑ばたけ  
ににッにと新葉しんばを爪剪つて  
春蠶はるご寝さした十八筵  
あがつた繭が玉のよで

京の商人あきどに惚れられた

三

### 水泡音

熱昂あがる——ながき病に  
敗れたる戦士が軀むくろ  
醫師いし今我手をとりにぬ  
聴きて後驗舌打診  
聽診器ぎ乗りてそこここ

小刻みに胸をありかせ  
怪訝顔、曰く『右肺に  
微かなる水泡音らっせゐきく』と

うき日なり——血の色なせる  
水薬の瓶にうつれる  
煤けたるヒポクラテスの  
鬚の渦怖げに見えて

高搏てる我脈きこゆ

三

夕しづか沈める室に  
天の占<sup>うら</sup>？冥府<sup>よみ</sup>の音して  
枕頭の椿は落ちぬ

### 夏は來ぬ

杏も散りぬ桃ちりぬ  
かくて櫻もちりにけり  
楨の葉發<sup>は</sup>きぬ桐ふきぬ  
櫨の梢も若葉しぬ

春<sup>は</sup>和らかに水湧けば  
女神が筆に彩りし  
戀の葩<sup>はな</sup>瀬に泛けて  
野川は海に嫁ぎけり

めぐしの鳥は雲にいり  
厨の鼠<sup>ねず</sup>翅<sup>はね</sup>生えて  
風にしたしむ玉簾<sup>たまだれ</sup>の  
簾に應ふと夏は來ぬ

京は鞍馬の青葉山

ひさし裳裾もほびかに

加茂の朝明水白う

少女が肌に染りけり

ときめく繪師が門にさく

栗の穂花の長かれと

繪絹展べたる灯も

更けて恨みの多かるを

せめてはつなぐ毘王寺の

三つの小瀧のしら糸に

夢はもつるる短夜の

鴉にあけし杉木立

五つの廟はぐも來す

神馬白さもやしなはず

諸樹もろき、皇子が靈を護り

夏を驕りのかんばしき

菱の浮葉の漂へる

池し繞れる若楓

緑やさ葉を爪ざりて

すさびや指も折りにける

松の大木に藤からみ

搦みて濃さむらさきの

天なる雲に擬ふては

鐘、力ある南禪寺

菩提樹風に薰じては

座禪の僧が髯のびて

悟道の境にいとふ

佛華道がに黄なる哉

そそりて高さあららぎの

見よ炎帝の駕をむかへ

ここにぞまたく夏は來ぬ

流れて清き京清水

金魚賣

都大路は初夏の  
翠簾かけし簷つづき  
埃を拂ふうち水に  
柳が見する風の綾

菅の小笠を淺う被て  
紺の脛巾に草鞋かけ

扇づかひもせはしげに  
聲ぞすすしき金魚うり

水かがやかに織りなせし  
活ける錦と何なれば  
汝はも交ふるむくつけき  
お化傘破れ塚

かかるをかしき生計も  
只騒がしき單調の

都にいとど興そへて  
呼ぶ人多き四條五條よ

### 卯月のふる郷をしのびて

ふる郷は卯月なかばの事映ことばえに  
山家訛りもなづかしき唄ぞながれて  
青にはふ桑の若葉を競ひ扱とく  
まみ麗はしき少女らが眉見せ吝む  
ま白なるあねかうぶりも動くらむ

また萱ぶきの廣平家風こそくもれ  
室まてふ室まはみな蠶こにかして端ぢかに  
紅あかき襷たすしいもうとはかひがひしくも  
熟練てねんなる音ねたてて桑を刻みつゝ  
ことあやまりに歸りこむわれをやまため

うつくしう眠りさめにし蠶こらは  
晝ひるの餌えまつとおのがじし蠶こ棚だなの床の  
狭さむしろにやさしき頸うなじもたげらむ



ふる郷こひしあゝ卯月——燕も軒に  
巢籠らむわがうまれたる家ぞこひし

180

### 春日まりで

せちに來てのぞく鹿の子に羞らひて  
かけし簾をざれまくる三笠山風  
角細工賣る家と隣る葉ざくらの  
窓に老びなくぬり籠のうぐひすききつ  
もの縫へる奈良の小家の妹にし

うつくし人を垣間見て心ときめく  
初夏の春日まうでの一日旅  
衣更へして身もかるにわれかのこころ  
木下道千の燈籠に苔むして  
老樹がらみの遅ぎきの藤こそしづれ  
薰風は太古ににたる杜わたり  
吹くや祝部に女巫に七堂伽藍  
默然と鐘ききおはす大佛の  
み顔のあたり一抹の香煙のぼり  
梁高の堂のあり巢のつばくらめ

181

みななきたちて日はくれぬいと蕭やかに

1511

### 京すだれ

葉柳けふる木屋町の  
小路くぐれば加茂川や  
岸の家並はよき家なみ  
翠簾捲いてほほゑみの  
京の子艶にかきあぐる

鬢のほつれの若いかな

欄の葱に水吹いて  
紅を氣にする小鏡に  
映ゆる秀つ眉すすし眸や

衣更して夏比女が  
緑髪玉の手にまいて  
假寝すらしの東山

1511

紫陽花

123

七彩衣の虹姫が  
玉のみ階の躑きに  
みどりのみ髪さともれて  
ぬけて落ちたるみ釵の  
戀の緋房や燃えにけむ  
下界に植物と生え出でて  
夏をおごりの廣庭に

榮ゆる葩うつくしう  
流るゝ匂ひこまやかに  
名さへもかりの七變花

こぼれ麥

畑の外の小石原  
物かげの落窪に  
こぼれ種大麥は  
雨うけて丈のびぬ

124

世の常の草のごと  
生ふるのみいたづらに  
日の神の愛にもれ  
智慧の實も賚はらず

(われ播きし權兵衛は  
こぼれしを知らぬらし  
肥施けず培はず  
雲雀老ひ皐月來ぬ

うつくしき緑髪を  
薰風に梳り  
嘻嘻としてさゝめける  
ともがらのときめきや)

幸うすきあだし身を  
いとせちにわび痴れつ  
ありし日をおもひいで  
大麥はなきぬるる

螢狩歌

螢來い——ほたる  
どこさしてゆくか  
そつちは鬼の居る山  
お嫁になら京へゆけ  
其畦つとて  
石橋こえて  
こつちへ來い京街道

よい宿とつてやろ  
京はよいくよいところ  
鹿の子屋に紅屋  
おしろいやに友禪屋  
すすしそうな扇屋  
どこへゆことままよ  
そのよい嫖致りょうで  
鄙住や惜しいもの  
京へゆけ水もよい

猪牙船

五平五反帆繕ふて  
伴清吉櫓を鳴らしや  
嬢ア左衛門衣洗ひ  
娘お舵が飯を炊く  
眷族四人皆揃ろて  
伏見を下る猪牙船が

唄ふ歌曲おもしろう  
笑ろて流るゝ淀の川  
淀の川瀬の水ぐるま  
廻つてやんで日が暮れて  
積荷卸して鉢巻解いて  
浴びに出掛ける『澤の鶴』

暮六ツ

残ると云ふも形ばかり  
扉の乳房雨に錆び  
仁王は肉も逞ましく  
空を睨める皆まなじりの  
道みちに威をば備へたり  
飛は蟻ちりやしなふ朽ち楹

いまは朱塗も剥げたれど  
暈酒ゆるさぬ山門の  
右と左に立ちならび  
こゝに語らぬ二百年  
塔は五重の天そそり  
高さを誇る寺なれど  
名ある和尚の逝きて後  
絶えて久しう釘締めず  
荒廢ちるがままにまかせたり

昔、修法の由緒ある  
伽藍の跡も絶えはてて  
聾となりし八十の  
鐘つき男徒らに  
忘れがちなる暮六つのかね

### 彗星

廐なる馬騒ぎ

峙たてなる鶏さけぶ  
凶兆物怖おそぢの  
早鎖す戸を射りて  
夜は猝にはか晃晃と  
彗星は現あられぬ  
光明は八紘に  
罪あるは悔いよとて  
眉長き大徳が  
巡錫じゆんしゃくのここちにも



袈裟姿悠悠と  
彗星は逍遙ひぬ

白光はただなはり  
地にあがる『聖者來』  
矛を棄て盾を棄て  
『最善』にかへりたる  
人の世をながめつつ  
彗星は過ぎ去りぬ

### 合歡花の窓

鈴ふり鳴らす駒鳥に  
水飼ふ妹をそとよびて  
書見に倦みし文机に  
繪筆しばしの戯れを  
かりそめに描く花すらも  
韓紅の濃き淡き  
まして自然の山川の

彩るすべもかたかるや

二五

疇昔名畫はおのが家の

燃ゆる火焰に嘯きて

活ける不動を畫きしと

戀の烽火や何の色

あわただしうも水注して

たもとたふ右手のわななきに

合歡の花窓つと推して

若き樂師にさすや浴紅

### 飴 賣

川に沿ひたる片町の

風しうむなる柳影

けふも來れる飴うりが

鳴らす喇叭の音も高う

奇しき節のたもとたげに

髻髮兒集めて飴細工

麻柯に粘けし塊を

二五

息吹けば成れる轆轤頸  
 瓢、不倒翁、都鳥、  
 さては狸の腹鼓  
 實にや可笑しき傀儡に  
 童が甘き心をば  
 買ふては甘き味ひと  
 換へてぞ辛き世を渡る  
 翁が張れる道の端の  
 假そめ店ぞおもしろき

### 垣根草

五月雨にたたかれて  
 焼板の垣の根に  
 もたれてはなきそばつ  
 三寸の名なし草  
 おなじ根も莖二本  
 一莖は垣の外に  
 わびしげの花ひらき

一莖は垣の内に  
ささやかなの蕾もつ  
外なるは姉にして  
内なるは妹ならし  
同じ根に生ひながら  
世の垣に遮られ  
よろこびもわかちえず  
なぐさめもかはしえず  
ただあだに開き散り  
おなじことくりかへし

ああかくていくとせか  
経ぬるらむ——草の裔すゑ

### 日盛り

石牆のくづれを  
氣けだる解だるげに匍はら匍ばひ  
裏がへる葛の葉

濃瑠璃なすなす蜥蜴かひは

白光る茶碗の  
破片の上を越りぬ

瘦圃の蚯蚓は

街道に這ひでて

眩めき斃れぬ

赤いろの旗して

踏切を警しむ

膚黒の女房や

砂利に立つ工夫の  
鶴背のかがやき  
汽車のぼる午後二時

### お美矢

お美矢家中の家老のむすめ  
櫻ちる夜を山村の  
茂作が家に婚づいて

伴種さとほによい夫婦

一六

なかが睦<sup>よ</sup>すぎて狐が嫉む

麥を刈ろとて二人也き

田植しよとて二人でる

氣兼苦勞がさてどんなもの

### 蝙蝠の歌

平和を讚<sup>うた</sup>美ふ鳥ともならで

鈍才遂に世に容れられず

驕りぞ護<sup>つげ</sup>謨の翹得ながら

奇怪や爾<sup>なんぢ</sup>白晝を怖れ

なぞ飄飄と夕べさまよふ

飛ぶを見れば鳥に似て非に

歩くを見れば壁<sup>や</sup>虎<sup>もり</sup>の如く

試みに捕へて頸<sup>うなじ</sup>叩けば

なくや恰も鼠を擬す

爾はさても何の族か

一七

あるは爾を厨の麿鼠が  
功成り了へて世に出しといへど  
破れし廂を棲家とするに  
いかで圓滿なる夢結ばうや  
即懷疑を深うする所以

虚空迥かに翔るとすれど  
彩雲なでて讚えんには  
小さき眼のあまりにぶき

雨も呪はず風も咎めず  
無爲又無爲にして暮景を愛づか

あらず祖先は鳥と伍して  
時を樟の空洞に覓め  
覇を禽界に握りたるを  
ある夜梟の妻に懸想れ  
隔ての小窓破りしとて

嫉妬深かる梟なれば

羽根うね僉あく撈らり脱だきて  
 破戒はかいの罪つみや亡なげせよと  
 暗染あんぜん黒くろき法衣ほふえ與よへ  
 かなたに遠とほく去さらしめしが  
 碎くだけて牙はと變かるるまで  
 無念むねんの嘴くちばしみにかみて  
 悔くいの涙なみだを袖そでに拭ぬひ  
 道みちがに白しろ日ひ飛とぶを愧かちて  
 あはれや蝙蝠かぶつ夕ゆふ鐘かねに歎なげく

### 蒙古來

四百餘州は席卷すとも  
 八洲やっしゅう尊たきものふどころ  
 おめおめ恐嚇おどしに乗のらうや時宗  
 我われこそ執權しやくけん相模守さうもすしぞと  
 目釘めくぎに唾つよして牒書じやくしよを卻かえり  
 睨にらめたる眼まなこぞ怖おそろしかりき



醜<sup>し</sup>が血塗るには勿體なきも  
蒙古十萬、所望とあらば  
斬らむは易かる大太刀小太刀  
千代の松原神風激して  
四千の籐籠あたちどころ  
玄洋の靈魚遽かに肥えぬ

隣どち

(小扇と繪團扇)

『晝顔咲いて雨もなく

野に蟬しぐれ暑い目を  
いかにそなたは送りやる』と  
やれさ、たづねた小扇

『葱<sup>しのぶ</sup>凋<sup>し</sup>るるまひるには  
晝<sup>ひる</sup>寝<sup>い</sup>の殿に抱かれて  
簾<sup>すだ</sup>越<sup>ご</sup>の風と語らふ』と  
やれさ、こたへた繪團扇

『頬骨高に齡<sup>とし</sup>とれば

舞も忘れていささめの  
風邪にも臂のたもげさ』と  
やれさ、やつれた小あふぎ

『嘆きやしやんすなこちとても  
いづれ厨にくすぶりて  
煙にさしぐむ宿世や』と  
やれさ、はかなむ繪うちは

### 麥 秋

汽車は病める我を乗せて  
麥秋を丹波に入りぬ

栗の花開きて  
雨の精を孚む  
鈍色の浮雲は  
南風を醸して

麥熟す丹波路――

家家の蠶に

八千株の桑樹は

衣をば剝がれて

黄金なす波上に

裸身を泛べぬ

土藏<sup>くら</sup>多き里<sup>さきわ</sup>回<sup>わ</sup>に

險囁ふや五月の

鯉のぼり雄雄しく

七郡の村村

富みたりやいしくも

菅笠の男女は

かがやかの野に出で

おほらかに麥刈る

おもしろの鄙歌

なづかしき丹波路――

蟻軍

地に黙語の咎宥れて  
蟬甦る短夜の  
今朝か脱ぎてし罪の衣や  
糧に餓ゑたる螻蟻は  
野望をここに恣ほしに  
されど東軍屯して  
我が領とせし丘なれば

などかは彼に任すべき  
倏ち起ちし蟻の王  
壘とりでに守備堅めしが  
西軍暴れに獮くろふにぞ  
さてこそ召よびし大軍や  
彼我相闘ぐ荒砂原  
石も火となる日盛りを  
急雨驟まじ地凱歌とどろく

井筒

戯れといへかしこくも  
水神彫りし左りの  
何をほこりの腕哉

荒くれ男「吞助」と  
道か穿井夫清水湧く  
井戸には應ふ名なりけり

夏日風なき雲の峰  
エンサエンサの掛聲も  
調し整くればおもしろの  
地下に征矢射る二百尺  
指折りや今日で二十五日  
男五人が力瘤  
やうやう水の脈衝いて

竹管たけをいるれば渾渾と  
靈泉いて逆る

## 虫干

蠹魚しは逃げゆく日盛を  
地つちにかぎろふ蘭蕪に  
先祖せんよりときめきし  
昔むかし偲べば懐かしき

春の夜毎を祖母君が  
灯かきたてよみませし  
馬琴種彦くさぐさの  
古き作者の草双紙

さてはかうむり鎧櫃  
朱鞘の刀銘なくも  
貝鏤めし『長船』や  
抜けば夏の日霧を吹く

風なき窓の書に倦じ  
かなぐりあさる虫干の  
布子社祓そがなかに  
さてもものし弓の卷

### 落雷賦

(口繪参照)

天上を駈けゆくはずみ  
綻びし雲に躓き  
すつてんと下界に落ちて

雷は甍みどろとなりぬ

環わにふりし七つの太鼓  
手あらかに鼓たき破りて  
ただのこる一つを背に  
唇うづけもちの失心ころや

夕立はかなたに去りて  
妻がうつ鼓音かすけく  
いたづらの角に嘲る

木間縫ふ名残の雫

一六

白光る牙をばむきて

雷は無量の悔み

ときめきし須臾を夢と

消えてゆく電を睜むる

### 一樹の蔭

(蝸牛と蛞蝓)

『そばふりつづく五月雨に

そなたは宿る家もなく

何樂みにくらすや』と

やれさ、尋ねた蝸牛

『うつくし家はありしかど

悲りに觸れて迦具土の

神に焼かれてかなしい』と

やれさ、嘆いたなめくぢ

『おなじ一樹の蔭を匍ふ

一七



えにしはふかい身ぢやほどに  
せめては軒をかさうか』と  
やれさ、憐いははるでむし

『あつい情けはうれしいが  
互に角を有もてる身の  
あらがふこともありては』と  
やれさ、辭いなむだ蛞蝓

### 京ぞめ

鼓枕のうたた寝に  
人まつほどのうす着して  
かせをひいたも誰も忍しのぶと  
襟を氣きにしてほつと息  
落ちし小櫛も其儘ままに  
小唄一つもうたはいで  
何をしきりのもの怨うらじ

玉章にはあらぬされぎれの  
もふべの夢をつぎあはせ  
ひとり水みる朝まどに  
有明行燈消えてほととぎす  
ほつれた鬢を吹く風に  
衣桁をすべるあでやかな  
戀のしぼりの京もかた

簾 賣

都路なればほととぎす  
晝を啼かねど夏柳  
よき橋多き川沿を  
乙鳥飛び交ふ五月晴

そろひ蘭笠の女連  
すがすがしさの扮装に

興やあるげのいそいと  
街を呼びゆく簾うり

『すすしい簾、伊豫すだれ  
かけてみやんせ繪簾』と  
昔めきたる賣聲も  
よしの風吹く浪華には  
なにとはなげにふさはしう  
朽ちし遣戸をそと明けて  
うしろ姿を懐かしむ

### 繡眼兒

ま夏日光の溶けて洩る  
雑木林の中にして  
楡の上枝をよろしみの  
囀の籠を吊したり  
媒鳥はなきぬ戀の譜か  
かわさし大氣さともれて  
全山つたふよき聲に

友はよろこびあつまりぬ

一四

こなた木陰にかくれては  
脆き運命に手を拍ちて  
狂はむばかり興じぬる  
人ありとしも知らざれば  
目白は籠にちかづきぬ  
歡喜の聲みなぎらせ——  
あまた飛びぬ枝移り  
美しき羽は繭をうけたり

### 機おり唄

けふも隣のあの桔槔に  
にくや艦音とだまされて

(とんとん機織る

南の窓の

柿の木陰で

蟬が鳴く)

一五

様を思へば箴さきの音ね冴えぬ  
絲が切れたも氣にかけて

(とんとん機おる)

みなみのまどの

柿の木陰で

蟬がなく)

經たてが様なら緯はきアこのわたし  
子持縞とて囃はなやされて

(とんとん機織る)

南の窓の

柿の木陰で

蟬が鳴く)

片頬なぶるは様吹いた風か  
船でくらすはいつちややら

(とんとん機おる)

みなみのまどの

柿の葉越しに

雲が湧く)

夏ばな賣

元

誰に見しよとて也た高島田  
淺葱手拭で吝をしむでつつむ  
娘盛りを花賣させて

『玉簪射于鹿の子百合』

撫子などはよろしかえ』

町の若衆にひやかさりよとて

濃い口紅やさしては來ねど

露の小徑こみちで遇ふ人もゑに

『ぎぼしもひあふぎ鹿の子もり

なでしこなぞはよろしかえ』

田植小唄で仕上げた聲の

花を賣るのに愚かがあるぞ

みんなみかへる道行く人は

『玉簪射于鹿の子百合』

撫子などはよろしかえ』

元

歸途<sup>かへり</sup>や横町の○やでやすみ  
 盆の踊りの浴衣を選<sup>え</sup>つて  
 などといそいそ花の香こぼす  
 『ぎぼしもひあふぎ鹿の子もり  
 なでしこなぞはよろしかえ』

### 田園夜興

にこり笑ふて月さまは

犢<sup>こらし</sup>や寝たかとねむた目で  
 さつき覗いて喜右衛門の  
 小屋の小蔭へ隠りやつた  
 明日も日和か春戸際の  
 丘の巨きな棕<sup>むく</sup>の木で  
 世話焼翁<sup>ぢ</sup>の梟<sup>ふくろう</sup>が  
 『糊つけほうせ』と啼いて居る  
 風が噂をひろげたか

門の榎の玉蟲の  
嫁になろとて灯をとり  
憧れ金龜子が飛んで來た

童謠三篇

(其一) 鳶

とんびく富右衛門  
朝からいくつ環を描いた  
輪ばかりかくのが飽いたなら

ちつと靱繪もかいてみい  
巴かくのも飽いたらば  
お宿へ歸つて晝寝せい  
鴉勘左と喧嘩して  
お雀小女郎に嗤はれな

(其二) 蜻蛉

とんぼく友太郎  
何を頻りに思案する  
暑つけや菅笠かしてやる



菅笠かすのは易いけど  
 そんなに頭をくるくくと  
 廻しちや折角冠かぶつても  
 あかい頬紐が解けるよ  
 とんぼく友太郎  
 何をさつても攷かんがへる

## (其三) きつつき

山の法師ほうし兒啄こ木鳥きは  
 お經よむのがいやぢやとて

麓小村へ下りて来て  
 日にちあちこち飛び廻り  
 木など叩いちや遊んでる  
 宿がないからきつつきは  
 露にあてられ雨にぬれ  
 黒い衣も色が褪せ  
 それに風邪かぜひて嚏くしゃみして  
 やつとこのごろ目がさめて  
 寺のお鐘が戀しなた  
 ぢやとて今更おめくと

歸山なるまい——いそのこと  
詫を頬赤に頼んだが  
いやといふのでいさ村の  
口くち輕かろ鳴なりに泣付いた

### 夏去秋來賦

夏は去ぬ

野のもき川がもき青海のもきて  
走る白帆はくはんに躓つづいて——

夏は去ぬ

江のもき森のもき湖のもきて  
跳はねた小鰻こゑんの髭撫ひなでて——

秋は來ぬ

野のこえ丘のこえ墟ふるじろこえて  
日ひやけ胡瓜ごりやの頬ほをなめて——

秋は來ぬ

江のこえ山のこえ破牆やれがきこえて  
白しろい小萩こはぎの袖そで揺ゆつて——

秋立つ日

朝日射す門に吊せる  
箒木の風に揺げば  
燕はもの怖ぢしてや  
幾度か來れども入らず  
暇子に秋こそ立てれ

芋の葉の銀零れ

畑じめり莠は伸びて  
幼き蟬蜚ぶや  
南蠻黍は赤鬚垂れて  
懶げのしほたれ姿

河近き里にしあれば  
鶺鴒はけぶれる母屋の  
破風の上に舌鏡に啼きて  
秋立つと告るが如くも  
胸白のみ使者の様や

西向の括り枕に  
 執念しよんくも病は癒えず  
 傷手負ふ墓をあはれみ  
 蕺草どくごの蔓はびる中へ  
 飲み贅ぜいきし牛乳う乳をそそぎぬ

東天を望みて

日暮れぬと戀おちかの

迷雲のゆきかひ  
 銀河あまのかはななめに  
 穹隆かむを劃りて  
 流れ星頻りに  
 味人を弄まさぐる  
 初秋の空かな

東峰に立ちたる  
 陰陽おんみやうの博士は  
 天邊を仰いで

おほきなる宇宙の  
掌たなごこを觀むとや  
懷ふしをさぐりて  
明鏡を出しぬ

### 野の者

神が醸ひせし新酒にひの  
觴さかづき舉げて敵も招よぶ  
我は寛なる國なるに

平和の誓何の舌ぞ  
愛するものに毒ふきて  
呪ふか、汝墓みに似たり

聞きけ掌てをついて詔みことごり  
石撃かげんは意いならぬを  
人としもなさはれ野の者

銀行

かたかたとおろす轆棒  
發いしたみ 駢みびし俥  
扉びを押して入れば煖すき爐しよ  
あたたかに富をおぼえぬ

網張かけふたりし窓の榜  
公債や爲替、貸附

収入や支拂預金  
いづれみな忙がしげなり

腰掛けてまてる丁稚や  
葉卷吸ふ眼鏡の紳士  
赤毛布、大工、船乗  
辮髪べんぱつの支那の商人

算盤や銀貨のひびき  
入る寶出づる寶や

瞬く間山なし積まれ  
ここぞげに黄金世界

ふとわれは手形の偽造  
贋札を巧むやからの  
おそろしきこころを思ひ  
身顛ひぬ紙幣さつよみつつも

## 軍 星

小窓を衡いて窺へば  
東に雲は駛りけり  
満天またくかきくれて  
北にかたよる邪星群

東の義星憤り  
光奪ふと斥候星ものみほし

使命かしこみ進みけむ  
天馬虚空にどよめきぬ

二六

黒雲しばし簇<sup>むら</sup>りて  
交戈の幕は蔽ひしが  
邪星もろくも地に隕<sup>お</sup>ちて  
樂星凱歌を奏しけり

### 満作歌

飛ぶや小蝗踊るや案山子  
鳴るよ鳴子がきやらきやらと  
笑顔見やんせ毛見衆<sup>しゅ</sup>が笑顔  
お嫁花嫁米ヤ満作の  
何に不足があらばこそ

五千萬石量<sup>はか</sup>りもようて

二七



三斗俵四斗俵しつかと五斗俵  
積んだお藏の抽扉も啓けて  
さつさ野鼠這入るがままよ  
孫も曾孫もよんで來い

三〇

### 旅ゆく君

月かげ更けて弧燈に  
肌うら寒きあばら家の  
山の一夜を木枕に

鶉さびしのものがたり

桔梗むらさき夜ははなれ  
をしき別れとなりにけり  
旅に愁ひてゆく君の  
情思みだるる萩すすき

秋のしらべの高うして  
君湖にいつるとき  
小笠の露をいとほしと

三一

歌筆染めむ草紅葉

松に比叡の風瀟せば  
片帆小舟の片もれて  
蘆が花ちる鴉の巢に  
孚くましめよ夕べの夢

三三

糧

野葡萄熟める石狩の

山路に育つ栗鼠のごと  
寵兒自然のみ慈恵に  
たり穂の稻は都にも  
美しく波と寄せくるを  
糧に憂ひて人の子が  
黄金をさぐるをかしさよ

野の溝くぐる野鼠も  
餒ゑまじものを窓推せば  
名なき草だに花をもち

三三

秋は榮しもあまねきに  
今日も鋼の筆とりて  
やれたる右手の袖口に  
われも利の子とわれを嘲る

渡頭

裾ごろも剝がれては  
宛然に畫に見たる  
獅子栖めるみんなみの

國に生ふ椰子のごと

川沿ひの櫻欄島

名にし負ふ山國の  
山幸を雪に覓て  
常冬の寒けれど  
人ごころむかしより  
うつくしき一部落

そこの村ここの里

川ひとつ隔つれど  
渡されしおほ綱は  
手と手とを握ること  
あたたかくむすばれぬ

靄迷ふ夕ぐれを  
岸に立ち高呼べば  
榎ほたけ燻る小屋いでて  
ふところ手むくむくと  
頬かむりの渡し守

力こそ衰ろへね  
星霜せいじょうの遷うつろひを  
爺ぢが皺は殖えたるに  
かはらぬは三抱への  
渡頭わたしほの大榎

乗合の里訛り  
何坊ななぼと名乗りなば  
十とせ經しそのかみの

酒買ひの童をば  
回慰る爺なれど

わがとしのひとり子を  
喪くせしときくからに  
六十の遠き耳  
あたらしくかき濁し  
なかせんもいたましと  
ことばなく舩ふねに

ゆく水をながむれば  
物憂げの渦捲や  
すれすれに筏士が  
からさびの木遣節

## 里の秋

氣きよき秋晴のひさ日を  
うまれし山里にかへりて

霧はれて迫れる山を

前に膽<sup>み</sup>て鳴<sup>な</sup>ききながら  
御所柿の落葉す縁に  
足投げて鳩笛つくる

それも倦み裏戸をいでて  
曼珠沙華薙ぎつつ也けば  
片鶉、小豆の畑に  
かさこそとかくろふけはひ

檜おほき山根の林

むれなくや頬赤、ほほ白  
四十雀、繡眼兒、やまがら  
啄木鳥木をこそつつけ

瞰下せは晝の日にほひ  
壁白の土藏こそ映也れ  
黄金稻半は刈られ  
野に颯がるますぐの煙

旅芝居明日來といそぎ

ふれあるく太鼓のひびき  
おほどかにいざよふ里を  
なつかしみ心あがりぬ

三三

### かかる夕

けふを一日のたたかひに  
疲れの息吹喘ぎく  
落暝なごりの色を收め  
鱗雲ひく秋天や

かかる夕を失戀の  
雀は西の海に入り  
めぐし斑入の蛤と  
姿や變へん一夜のうちに

### 停車場

『粟おこし辨當正宗  
新聞や』—— 呼聲せはし

三三

五分鈴頻りに鳴りて  
汽車はまた息吹きはじめぬ

學生や職人すがた

妻を伴く無髯の紳士

僧、卜者、兵士あきうど

人なだれ——それも一時

笛なりぬ——刹那のおもひ

歡喜やあるは憂愁

さまざまのこころを眺みて

汽車は世の闇へと駛せぬ

三たり也き七人去りて

ただ一人昇る跨線橋

さびしさに冥府をおもひぬ

我は今——人とわかれて



病める文鳥

三六

日の秋を籠にしやみて  
文鳥はうたはずなりぬ  
ひもすがら罫にこもり  
香にほふ餌をも食まず

追憶の夢よりさめて  
哀愁に前後もしらず

野ごころも忘じはててや  
うるみ眸に妻鳥をながめぬ

いたましや野禽の群に  
俊れたる才有ちながら  
汝は終に世をしも揺らす  
むなしくも消ぬるいのちか

かくおもひ閉づるまなこに  
朦朧と冥界こそうつれ

三七

静寂はひたにつのりて  
故しらす涙ながれぬ

### 落 鮎

伐りて流せる靈木の  
崇き香のみなざりに  
太古ながらの氣をこめて  
七里繞る黙川や

十月曇、鮎肥えて  
瀬渦卷く戀の峽  
女夫が岩に肚すりて  
月夜静かに落ちてゆく哉

### 孤 兒

去れり、燕は兒を具れて  
みなみの海のあたたかき  
美しく島の殿堂に――

潮風いかにすさぶとも  
母に傍そばひもく旅なれば  
たびものがたりおもしろく  
洋みぎに射かくる秋晴を  
翅つばさ撃うくに興あらむ

靈ちから力は弱き鳥だにも  
世に齋いらくべき親を有もてば  
飛ぶに和にじ毛けの輕うして

朝虹躑けらむ雄心をこころも  
ちひさき胸むねに趨むからむを

運命さだめはかなし人の子に  
全はき榮光えいを得せしめず  
默想もくしゆを慕うふ夕雲の  
うつろひ敏くろき廻轉くわんさに  
黒くろき魔まの掌てを怒うむかな  
さはれ快樂けらくを謳うふ世に

寂寥の闇界を辿る身の  
喩はば樵夫の笠うちて  
十月、落つる山毛櫨の果の  
地にさびしく朽つるごと

光明招がぬ可憐兒に  
神よ拯ひの偉御手を  
懊惱の淵に垂れたまへ  
幸福うすく生れ出て  
笑むことしらぬ兒らよ、ああ

宏き天地の巨甕に  
甘かる乳はみなぎれと  
母と馴寄らむかげも覓ず  
渴ける唇に艸噬んで  
野に髡ぼへるあはれみなし兒

## 野分

海に凱歌あぐ龍神が

矜りの息か砂吹きて  
吹きもあげたり建部山  
村は名に負ふ東雲の

星屑光をかくまひて  
怪しき雲は魔の如く  
北に起りてみんなみに  
起るや鳴るやうづまくや

この時祠の獅子は吼へ

社頭の神鶏ただならぬ  
怒りの頸血を帯んで  
警聲高くなさに啼く

案山子があわてふためくや  
鳴子は飛んで鳴らずけり  
高粱鬪ぐ畔にたち  
衰作與作何を恐るる

阜 蝨

くはし稻葉を害そしなひて  
飽くことしらぬ汝なが祖おやは  
ある日召されて罪すると  
唇くちばし鐵漿てつじやうをさされしが

其子親の子性を享うけ  
百萬石の田を荒らす

親にも劣まけぬ横暴や  
いで懲らさんず足か手か

否否神のみ情けに  
飛ぶことのみは宥ゆるれにしが  
妻よぶこともかなはざる  
蝗は遂に啞おろとなりぬる

盆踊

二頁

月の八幡廣うはないが  
村の若衆が踊りの場所よ  
音頭とるのは與作ぢやないか  
與作よい聲ようとほる  
——盆のお月さんは

まんまるこてまるて——  
ヨヤサヨイヤサ

前へ蹴出してひく手を斜かたに  
横で掌てを拍ちちよと及び腰  
あづま手拭京染もかた  
お米よい姿ぶらよう踊る  
——まるてまんまるこて

まだまるい——  
ヨイヤサヨヤサ

二頁

磯日和

網曝すさらさざる  
潮錆びの八千杙やちぢや  
板びさしかすめては  
鷗鳴く磯日和  
漁すんどりの翁おきならが  
海神と齋いっさぬる  
水無月の大社

奉納の一字書

ここのつつの蚕かいの子が  
適あはれのくくづし龍  
雲映る汀には  
捨舟の腹たたく  
をとこ波女波  
寄居虫の夢也する  
蘆の花かつちりて



## 野の戀

『案山子郎』と『鳴子女』

『心あがりの秋日和

黄金こがねの波の香に酔ふて

われか心地のうれしさに

尙忘られぬ踊り癖

それが可笑してきやらきやらと

そちは笑ふて居やるか』と

やれさ、訊たづねた案山子郎

『出来秋なれば雀まで

踊るを何のをかしかる

そなたが態ぶらの見馴れたる

こちが目にさへ面白く

ついつりこまれ我知らず

あれはたたいた手拍子』と

やれさ、まぎらす鳴子女

『かうして永い日をめでて  
 同じ山田を守<sup>も</sup>る程に  
 えにしも深の身のなさけ  
 はにかみ勝のそちが顔  
 直目<sup>なめ</sup>に見ては懂<sup>ぶか</sup>るるを  
 あはれとだにも思<sup>も</sup>はぬか』と  
 やれさ、いひ寄るかがしろ

『うれしい事を聞く日哉  
 こちも思ひは八千顆<sup>やちつぶ</sup>の

瑞<sup>みづ</sup>の穂よりもさはなれど  
 女ぢからの悲しさは  
 うたれし繩も得絶たずて  
 自由<sup>ま</sup>ならぬ身を煩らふ』と  
 やれさ、あいだるなるこめ

秋の日

古里<sup>ふる</sup>めきし小村を過ぎて  
 夢ごこちうつらうつらと

うけあゆみ片野の阜つかさ  
散葉舞ふ下に憇ひぬ

二五

野の徑はここにあつまり  
ひと筋のひろき坂道  
唄うたひ赤裳褰げて  
のぼり行く茜の日傘

仁王門右手に聳え  
眸めにいるはい立つ巨人と

梱包こんぱうを積みし牛車と  
左手に低き藁ぶき  
木兎のかたちす家と  
軒のきに干す青丹あざにの衣きぬと

おもふ今かの家の縁に  
茶汲女を譚たひつつも  
皮乍かわら柿かきを齧かじれる  
若人わかうとの鄙びびし姿

二五

又思ふ都通ひの  
小商人、六部馬喰  
聲嘎れし女祭文  
腰かけて世語るさまを

ふと我はあるか無きかの  
ささやかなの記憶を育て  
十三の初旅を浮べぬ  
今は亡き姉としかたり  
伯母訪ふと丹波路もきしも

鳴子鳴るかかる日なりき

### 月夜の虹

肌さむの寝ざめ月  
あこがれの京の山  
名にしおふ三尾をば  
狩りくらす紅葉人  
艸臥を嵐峽の

温泉ゆの宿しゆくの小醺こよめ

醉よめひしれてかへるさに

十五ご夜よの月照りぬ

時雨さへ降りいでつ

まぼろしかげにうつつ

いと灰ほに虹たちぬ

まどかなる西の峰をに――

古のくはし女の

彩いろつ魂たまいまここに

現せしと疑ひぬ

嵯峨路をし行きつつも――

小雨歇み虹さえぬ――

都よりかへるさの

桂女はゆきずりに

すげなうももの言はず

ふと思ふ歩をとめて

静寂しじやくの一瞬を

我は今月宮に  
囚はる身ならぬかと――

## 落日

瘡れ臥す茸毛が腹に  
敗残の身をこそ支へ  
血にじむ騎士が青服  
伸しなやむ重き蹠  
悪戦に疲れあぐみて

生の色失せぬ薬盒も  
雑囊も脚絆も靴も

――殷殷と砲聲きこゆ――

傷士が手弓手に援りて  
拳銃を馬手に直立つ  
絳服の老いし將軍  
きと睨めぬ遠方よりぞ  
陽炎のごとく寄せ来る

大軍を馬のあがきを

三四

——殷殷と砲聲きこゆ——

日は半ば砂漠の涯に

うすづきて風今死すを

寸の椰子そよぎぬ藐か

## 廢園

戀の華繚亂としてわが春を

咲き競ひたる胸の園、愛の泉も

かれはてて破れし壇には蠱の蜘蛛

擅まにも巢をはりてたまたま來る

「歡樂」の羽虫を啖ひ禍の鳥

日に夜にきたりほとほとと鋭き嘴に

敗殘のうつぼ木啄く——脈の音

三五

園の裡には涙の樹いたく繁りて  
陰鬱の木ぐれに日見す「寂寥」の  
黄なる花はた「追憶」の夢の色なす  
蔓長き花こそ咲けれ運命の  
邇き路をば設くると鬼どもあまた  
白光る鶴嘴かざし刻刻に  
園をめぐけて迫りくれ——不安の思

## 碑

しとしとと  
秋雨降りて物わびし  
地藏蓮華座しだらなく  
ころびてくらき仕事場に  
角さんは今日も碑を鐫る

(罪あるわぎを棄てよとて



壁を隔てて細き聲

きくとしもなきうなだれに

いつしかやみぬ鎚の音

こくこくと

巷ちまたさびしく日はくれぬ

横に臥せれる碑いしは

ゆるげるけはひ胸よりぞ

迷ひ飛ぶ怪しき火花

(彫ほりし梵ほん字はむくつけき

貌かほと變りて嘲あざみの眼め

いともするどく瞳なほれるに

えと身み慄ぞろひて鎚づち投げぬ)

## 里の秋

まんだ間がある八幡畑へ

いどこ提ひげてこ柿かきぼりに

下駄げたぢゃはま虧かく石高道は

草履がよいよい尻切れの  
 山の裾からよぼるは粟に  
 かごむ案山子の聲ぢややら  
 おどろ樵るのは誰ぢやろああれ  
 お仙こち向け翫てやろ  
 霧の山鳩捕ろとてきのふ  
 架けた地くぐつ見でみてこ  
 柜をぼはれてお饒舌の鴨は  
 庄屋が悪口もてあるく

註 こは丹波山家近在の方言也「いごこ」

は丸き箆籠、「ぼり」は振ぐこと、「はま」は  
 下駄の齒、「よぼる」は呼ばはる、「かごむ」  
 は隠る、「おどろ」は柴、「地くぐつ」は陷良、  
 「見て見てこ」は試に見て来やう、「ぼはれ」  
 は逐はれるの義

### 小春日

農事はそばに梭とる嫁を  
 けふも嘉平翁が自慢吐き廻る  
 大根小蕪そんのい擔のて

お菅えらかるけどのうこばれ  
なんぼ若い衆が囃そとままよ  
けなりがらせに緋禪やささぬ  
鰥鳥が『かゝ』とて騒ぐ

小春ほこほこ畑の日向

瞽女の鰥鼠に螻蛄奴が惚れりや

ほんまいげちや土掘り探す

馬が数多いくお年貢つけて

小唄暢びり並木の道を

註 こは舞鶴附近村落の方言なり、はそば

は隙間、そのいは其様に、わらかるけど  
のうこばれは苦痛なれど忍べ、けなりがら  
せは羨ましがらせ、いげちやは可憐なりの  
意義

### 針

七いろの虹にかもにる友染の

花こそひらけ針山に

針どもあまたざれ遊ぶ

みな一やうにしろがねの

衣をまとひて老いたるは  
ま白き髪を若者は  
黒きを垂れてあるは立ち  
あるは横臥し物がたる  
時しもききぬ遠砧  
冬來明日よりはげまむと  
かくして針は翁然と  
世を縫ひわたる——衣の波

## 行 秋

瓊とめで窓にながめし  
ただひとつのこる木酖  
口卑しき鴉にとられ  
柿の木は遽かに老けぬ  
生きのこるきちきち蟬蛻  
牛小屋の灰濁む壁に

妻よべど妻は來らず  
わびしげの髯ふりやうや

三六

牧場の圓木の牆は

さながらに亡びし秋の  
肋骨をば脛せるごとき  
さまと見え涙ながれぬ

ゆく秋の門邊に立ちて  
そこはかと目移しあれば

郵便夫いそぎこそくれ  
人死すと悲しき通信

### 冬立つ朝

後園に山氣降りて  
霜結び息凝るあした  
佛子柑は拳さむげに  
零さじと香をこそ秘むれ

三七

隠元豆老いて壯んに  
 敗殘の芭蕉をいたみ  
 額じろの駒は廐に  
 齒軋りぞ高く藁食む  
 車井の側にとかけし  
 あかがねの洗面盥  
 ざれ風に吹き落されて  
 けたたまし冬來しひびき

池端を列なしありく  
 囂ましき鶯の群に  
 翩翩と山茶花ちりて  
 時計今七時を撃ちぬ

### 冬翁來

炭焼く煙朝を寒み  
 梟木兎額よせて  
 樞の老樹にものがたる

北なる峰を谿に下り  
粗造りなる旅木皮靴に  
霜柱砕きつつ睥づたひ  
先づ凧をさきだてて  
冬の翁は來りけり

### 並木道

乳母を訪ふとて長田野越えて  
村に出た出た多保市

小唄よい聲謳ふをきけば  
仙太みたよぢや、松並木

『福知山さんは葵のご紋  
いかなお大名もかなやせぬ』  
小春日和に鈴馬曳いて  
銜煙管が憎い程

磯の冬

啼ける磯に潮さして  
蹴ひたすに驚けば  
眠りし石は夢のまま  
舟の如くも泛び行く

冬の入江に綸垂れて  
鯿釣る舟のたまたまに

木の葉に似たる魚あげて  
興がる人の頬冠

戦ぎ折れてし葦がくれ  
冬菜洗ひし子は去りて  
うらさびれたる夕暮を  
なだれ落来る葭雀

泥浚船の音寒く  
建部山に散ふ雪雲の



雪ともならむ北風に  
帆して入り来る五大力

### 坤女怨

戀の焔を山に噴き  
呪詛か飛ばす石塊の  
隕つる響や山彦の  
煩悶の號び怖れすや

いつの太古か誰ありて  
美女を坤に禁めし  
天の大氣に觸れざれば  
少女飽くまで若やげと  
たまたま人を怨じては  
胸にみなぎるくれなるの  
血汐や燃えて滾りぬか  
狂ふて高く搏つ脈ぞ

五百千歳世に匿れ  
 地球の歴史を嗤ふては「嗤。俗に嗤に作らざる者まで嗤に作らば  
 古き秘密をかくまひし 又わらひ、あざけり、そしり、さげし、み。  
 驕慢の國を揺りに揺さぶる

### 獺 狩

石たたき妻どひて  
 岩づたひ聲かすか

夕ぐれをこひわたる  
 冬ざれの早瀬川

大杜父魚竊みては  
 かくれたる水獺の  
 値して手をうつや  
 ほほゑみの二十兩

魔性とぞ聞くからに  
 小娘に化けもせば

燧石火を憂ちて  
逋ぐるをば一發に

月の夜を築守が  
火繩銃ひだり手に  
破小屋の窓窺く  
頬にほてる櫓の火の

みのむし

冬の日のあたたかに  
鶏遊ぶ裏ばたけ  
茶の花のほひては  
こぼるるが惜しければ  
ひと枝をそと折りて  
さびれたる古甕に  
こころなきなげ挿しや

新らしくふくらめる  
 ましろなる秀苔ほつほりの  
 玉のごとはしければ  
 三日みかを経し夕べしも  
 燭よせてながむるに  
 蓑虫は宿ながら  
 とらはれの身をわびて  
 ともし火を怖れてか  
 かくれいる葉のかげに

### 網代守

望みはおなじあまさかる  
 都に雲を趁おひし身の  
 われから拗すねて世をせばみ  
 小蓑にかげを窠やうすかな  
 あやしうむすぶ假小屋や  
 水に沈める火柱ほばしらは

何を呪ひの光か消え  
消えては燃えて明滅と

戀かしばなく川千鳥  
闇より闇に縫ふ聲の  
回想つめたき人の子に  
なぞや運命を傷ましむ

小ひさき氷魚の骸をば  
ああそを糧のなりはひに

三十やいまだ妻もなく  
冬の夜わぶるあじろ守

### 小春日

枇杷の花佗び咲く檐端  
たてかけし張物板に  
十一月の晝の日あたり  
椽に干す手習草紙  
墨の香により来る蠅に

戯れ狂ふ小猫の鈴音  
榎梓は梢に二つ  
囁きてうちゑむけはひ  
鳶低う環を描く下の  
藁ぶきの小野の一つ家  
肩脱ぎて薪割る爺が  
鉞のひびきはたはた

## 雪の朝

櫻欄竹に雀さわぎて  
大雪の朝は明けたり  
歌の『斑』はよろこび  
疾く起きて庭面ざれ飛ぶ  
南天燭の紅き實食むと  
簷に來し餒ゑし鶇

わが強き噓に怯え

高啼きてかなたへ去りぬ

目移せば藪のかたかげ

弟がよべのいたづら

かりそめに張りし鳥網かみに

鴟ふくろふはかかりて悶く

### 冬ざれ川

鴉啼く河岸かの家

高く干す莫大めりや小地すぢ

長う垂れ眞白きに

風見えて寒き朝

水ぐるま騒がしう

がたごととのぼりゆく

伏見也き川蒸汽  
物憂げの船脚や

夜ならば歌たかく

足ばやに怖ぢ過ぎむ

樹立なき長塘

冬ざれの大き川

立見する群わけて

窺へば舟の衆は

溺れ人搜すとや  
投げ入るる又錨

並め打ちし銹杙に

蝨はれる泡沫の

人の身と相似たる

宿世をばかたり顔



靈鹿

誇りは山の北丹波  
南に暢ぶる山脈の  
蜿蜒として窮みなく  
松、杉、檜、樅、櫻  
あらゆる喬木生ひたちて  
皮膚あからびて覆鑠と  
筋骨いよよ逞しき

人にも肖たる姿かな  
草鞋弛みて躓きて  
叫びし聲のおどろきに  
響反すは木精にて  
噓に魑魅うち囀ふ  
さてもこの山山の靈  
角三尺の五岐の  
性ぞ暴かる鹿栖むと  
翁震慄の物がたり

山には馴れし老樵夫  
荆棘塞がる徑も究り  
獸ながらの妻ごめに  
戀する聲もしばきくと  
弓に名手と讃はれし  
矢太郎もあり猪之助は  
右の瞳は失へど  
左眼の狙ひあやまたず

朝まだくらき山家村  
狩衣つけたる獵夫らが  
望の笑みのみなぎりに  
愛宕の山も動くがする  
もの逐ふ聲の壑に墜ち  
墮ちては野邊にひろごりて  
殷んなる哉轟轟と  
鐵砲のひびきの血に凄き

道がに犬は口黒の

山に育ちし日本犬  
 祟りをしらぬ猛者なれば  
 山靈をこそ瘧したれ  
 みん事なりや、エサエサと  
 男四たりが玉の汗  
 傾斜の眸を擔ひくる  
 牡鹿あまりに恐怖あり  
 よべを爐邊の大胡座  
 雪の獲物に酒すぎて

舌もまはらぬ壯俊が  
 石の地藏に笠被せて  
 仁王と衿る功名に  
 罪なき團樂興湧くや  
 霰交りの吹雪して  
 山鳴る音のすさまじき

## 年木山

樅の伏木にちよと腰かけの

粗い刻菘を一ぷく喫んで  
よやしや樵れ樵れ朴の木、櫟  
柞、黒文字、楡、正木

三十六峯ひびけと斧を  
こして樵る日にや名木ぢやとて  
柴と紮げて一把がなんぼ  
焚けば煙となるばかり

煙の浮世に煙のよな命

浮世はなれた山中なれば  
心暢ンびり今年もくれて  
翌けりや見らるる孫の顔

風にとられた竹の子笠の  
懸かる枯枝に鼯鼠飛んで  
どこへ巢かけよと頭の上を  
迷ふ鵲に日が暮れる

## 寒の餅

寒のあかぬ間に缺餅搗この  
爺と媪とが圍爐裡の對話

小田で收穫つた糯米一斗  
俵解いてはや足ぶみの

漉いて磨いて浸して蒸して

臼にうつして手水を汲むで  
爺が鉢まき杵ふりあげりや  
媪は臼とる禳がけ

## 群鯨來

千波うち萬波鳴り  
夜は明けぬ與謝の海  
島いくつ碎けしか

仄見ゆる海の怪

一里列なし鯨來る——

邇づきぬ波を蹴り

脂ぎる黝<sup>くろ</sup>き脊<sup>せ</sup>に

ぎらぎらと日を浴びつ

磯さして悠悠と

群がる鯨數を知らず——

鞆<sup>たもと</sup>と春寒の

岸を撲つ狂ひ濤

七村を擧げてわと

押寄せぬ浦人ら

鯨ことごと潮を噴きぬ——

### 冬ざれの舞鶴

埃だらけの仕事着もいたくほころび

櫻欄のごと頭髮<sup>あたま</sup>みだれし帚賣

皺<sup>しわ</sup>嗔聲<sup>しんせい</sup>に呼びやくや冬ざれ街を

とぼとぼと朝鮮沓の音さびし

今、濱通り魚市場人こそぞめけ  
漁れだての大鱈あまたそこここに  
鮪、赤鱒、かぶと蟹、章魚の入道  
腥さきなかを脱け出てたどたと

われは來りぬ、五大力つくるひすると  
大工らが煙草やすみの戯れ話  
雪催ひする丹後富士寒げにながめ  
鉋屑猛に燃やせるほとりへと

また詣で寄る濱社高麗犬黙し  
風防けの樹ごしに見ゆる網かけ場  
あちらむきなる鯊釣の頬冠りうちて  
笛鳴らし宮津がよひの蒸汽出づ

## 吸入器

君を灼く胸の烈火か  
かと燃ゆる酒精の焰

ニツケルの釜こそ陰れ  
 ことごとと湯ぞ沸き滾る  
 細き管つとこそ騰れ  
 何をかも艫れる蒸気  
 薬の香すい鹹き液を  
 霧と噴く音こそ響け  
 やまうどは喇叭のごとき  
 玻瓈の前口をひらきて  
 吸入れぬ肺も浸せと  
 刻々に噴霧の音は

高まりぬはげしききほひ  
 ふとおもふ母の膝にし  
 うたた寝にむかし晰きたる  
 ふる郷の太河のひびき  
 また思ふ裏手にひろき  
 竹林に風する音を  
 吸入器かけつつわれは  
 かくおもひ眼ふたぎぬ



## 懷爐灰

鼠色なす衣きたる

懷爐の灰は燃ゆる火と

いともするどき接吻に

酔ひほけて入る戀の室

——天鵞絨のほひ——

昨の快樂を夢みつつ

ねむりぬ灰は冬の夜の

さむさもしらずあたたかに

ほしいままなる懷爐の家

——驕りの寢息——

夢はも醒めぬ灰はわが

戀に燃えたる亡軀の

棄てらるるみてなげかひぬ

冷えゆく家のくぐり戸に

——ああ懷爐灰——

愛の曲

七彩にひく虹の環ひろく  
二人が戀の領にはあまり  
時には天に弓をも彎いて  
時には地に草の實薙ぐや  
糧も也たかに麻は茂れり

われらが愛はわが自由なれば

花野に咲きて露に笑むごと  
相翁の胸にくしき光の  
相映ひて暗をも知らず  
無限無窮の快樂に耽る

東 天 紅 (終)

頁調濟・三橋

明治四十一年七月十日印刷  
明治四十一年七月十五日發行

不許複製

著者	筒井齊	京都府下丹後國舞鶴町字魚屋二番戸
發行者	石塚猪男藏	大阪市東區安土町四丁目三十番屋敷
製印本刷者	堀越幸	大阪市西區阿波座二番丁一番地 (電話西二〇九六番 電話西一一四二番)

發賣所 石塚書舖  
 大阪市東區安土町心齋橋筋東へ入  
 電話東二〇二四番



2748



Handwritten Japanese characters in the top-right area of the right page. The characters appear to be '明徳堂' (Mei-ido) written in a cursive style.

Handwritten Japanese characters in the bottom-left corner of the left page, possibly '明徳堂' (Mei-ido).

